



(モデル：吉松 野乃子)

ノートパソコンを開いて、スマホを片手に食事。嘘みたいな光景だけれど、心当たりのある大学生も多いかもしれない。シャンプーの詰め替えや爪切りみたいに、すぐに済ませられるはずなのに、そのために時間を作るのが面倒なことってたくさんある。洗濯やドライヤーにいたっては、いつだって面倒くさい。

私たちの生活を困むたくさんの物からたくさんの情報が浴びせられる。

まばゆい光に疲れきって、それでも生きていかなきゃいけないから、サングラスをかけてみたりする。

全部放棄したいと思っても全部は放棄できないのが生活。

さて、何を抱えて生活しよう。

KEIO SFC REVIEW

TABLE OF CONTENTS

No. **76**

特集

02 生活があるから

04 生活の研究

04 ① 複数の言語と複数の文化を生きる
藤田 護 (環境情報学部専任講師)

10 ② 家に住む、まちに住む
中川 エリカ (政策・メディア研究科専任講師)

16 ③ 「理想的」でなくても
永田 智子 (看護医療学部教授)

22 ④ 少しずつ、変わるはず
塚原 沙智子 (環境情報学部准教授)
市川 美優 (総合政策学部4年)
曾根 直樹 (環境情報学部4年)
バーン 杏雅愛 (総合政策学部3年)

31 SFC 生の生態

39 イータヴィレッジ

40 苦節十五年、イータヴィレッジ開寮までの歴史
國領 二郎 (総合政策学部教授)

42 寮が繋ぐ、キャンパスライフと地域の未来
加藤 文俊 (環境情報学部教授)

44 暗中模索、寮生次第のルール制定
喜納 天志 (総合政策学部2年)

46 イータヴィレッジ寮生の部屋

連載

48 七夕祭取材記 / キャンパスの姿 2023 秋

50 When I was young
松井 孝治 (総合政策学部教授)

54 寄稿 わたしの推薦図書 No.12
鶴岡 路人 (総合政策学部准教授)

56 編集後記

生活があるから

04 生活の研究

- 04 ① 複数の言語と複数の文化を生きる
藤田 護 (環境情報学部専任講師)
- 10 ② 家に住む、まちに住む
中川 エリカ (政策・メディア研究科専任講師)
- 16 ③ 「理想的」でなくても
永田 智子 (看護医療学部教授)
- 22 ④ 少しずつ、変わるはず
塚原 沙智子 (環境情報学部准教授)
市川 美優 (総合政策学部4年)
曽根 直樹 (環境情報学部4年)
バーン 杏雅愛 (総合政策学部3年)

31 SFC生の生態

39 イータヴィレッジ

- 40 苦節十五年、イータヴィレッジ開寮までの歴史
國領 二郎 (総合政策学部教授)
- 42 寮が繋ぐ、キャンパスライフと地域の未来
加藤 文俊 (環境情報学部教授)
- 44 暗中模索、寮生次第のルール制定
喜納 天志 (総合政策学部2年)
- 46 イータヴィレッジ寮生の部屋

生活の不思議。
何もしなくても、既にそこにあるものだということ。と同時に、新たに作り上げ、自らの意志で変えていけるものでもあるということ。
振り返れば、積み重なった生活が人生となっっていること。日々の小さな変化を繰り返すうち、すっかり人生が変わっていたりもすること。
一人ひとりの生活が集まると、そこには一つの社会の姿が浮かび上がる。
それでもやっぱり、生活は多様で、生活は変わる。それを無視することはできない。
合理的な答えは必ずしも適用されず、果てしなくこまごまとした事情たちが絶妙にバランスを取りながら、今日も生活は続いていく。
SFC的生活の考察。

ラテンアメリカのアンデス高地や北海道に赴き、アイマラ語¹、ケチュア語²、アイヌ語などの先住民言語やそれらの言語の口承文学を研究する藤田護先生。先生が考える「暮らしや生活」をお聞きした。

生活の研究①

複数の言語と 複数の文化を生きる

藤田 護

●もともとは地域研究が専門
——藤田先生は、研究において主どのような観点や側面を重視されていますか。

私自身はもともと地域研究という分野が専門です。地域研究というのは包括的な学問分野で、領域横断的にその地域を全体として理解しようとする傾向を持っています。そのため、一つの側面だけに注目するということはあまりありません。

ラテンアメリカでは、もともとアメリカ大陸の先住民たちの社会や文化、文明があったところに、上からヨーロッパの文化や文明が被さってきました。その先住民とヨーロッパの文明や文化がどのように相互作用するのかというところに常に関心があります。できるだけ先住民の人たちに近いところで、スペイン語だけではなく先住民の言葉も少しずつ勉強し、自分でもその言葉を話しながら、研究を進めていきたいと思っています。

また、一つの家族にびったりとくっついて、一緒にいろいろと経験させてもらいながら研究をしているので、やはりその家族との付き合いを大事にしています。その家族を通じて地域を見る、社会を見るという傾向が私は強いかもしれませんね。

——現在の研究テーマにはどのような取り組みができましたか。

いろいろなテーマを扱ってきましたが、ボリビアとペルーに通うということはずっと続けてきました。そして今後も、できればずっと通い続けたいと思っています。

日本国内では、アイヌの若い人たちが自分たちの言葉であるアイヌ語をもう一回取り戻そうとする運動に関わっています。一回関わったからには、その運動にもずっと参加し続けたいと思っています。

私にとって研究や研究テーマというものは、その関わり続けるための手段とも言えます。

ですから、自分が関心のある研究のテーマが先にあって調査・研究をするというより、その時々、その場、その集団の中で、自分がやって意味があると思えることを研究テーマにしています。

●研究会は違うテーマで二つ持っている

——研究会ではどのような活動をしていますか。

私には、ここSFCで、スペイン語のコーディネーターという職務があります。それに加えて、同時に二つ研究会を持つのもいいというSFCの制度は、とてもありがたいと思っています。現在は、スペイン語教育やスペイン語圏の地域研究を扱うようなスペイン語をベースにした研究会と、アイヌ語やそのアイヌ語で口承される物語を学んでいながらアイヌ語を取り戻そうとする運動に参加する研究会の二つを運営しています。自分が今日まで研究してきたテーマに近い形で、二つの研究会

を立てている感じですね。

●日本とは違う生活？

——地域や民族ごとに違う暮らしや生活の特徴はありますか。

どこまでを「違う」と言えるかは難しいところだと思います。

例えばボリビアやペルーの先住民社会では、途中から会議に参加するととなると、場合によっては会

議を中断してでもその場にいるメンバー全員に挨拶をして回らないといけません。新しく入ってきた人を、みんなで迎え入れてから再開するという習慣ですね。

今の日本はどちらかというと「迷惑かけないように」という気持ちや先に立ちますが、昔の寄り合いや村とかでは、日本人も実は同じようなことをやっていたのではなにかと思うこともあります。とな

ると、「これは違うと言えるのだろうか」と考えるわけです。私が日本の大きな都市で育ってきたために、知らないまま生きてきたことを、もう一度学び直しているということなのかもしれません。

家族の中でご飯を食べている時も、食べ終わった時に全員に挨拶しないといけないんですよ。ごちそうさまと言う代わりに、スペイン語のサンキューにあたる「gracias」を相手の名前と共に一人ずつ言っている、言われた人は皆が「provehcho」という言葉を返す。一人ひとりが全員とこのやりとりをして、初めて食事の時間が終わりになるんですよ。

家族やコミュニティを感じられるしきたりや振る舞いが生活の端々にあるように感じて、面白いなと思います。

——民族や地域の歴史的背景が現在の暮らしや生活にどう影響を与えていると考えますか。

ることができませんから。それに、研究者は誰と付き合うかも自分で決めることができる自営業的な色彩が強い職業で、それも自分にとっては良かったと思っています。でも私は自分の性格や人となり、フィールドワークに向いているかと言うと、そんなことはないよ。うな気がするんですよ。あまり簡単に人の懐に飛び込んでいけるような性格でもないし。ただそれでも、時間さえかけていけば人との付き合いを深くしていくことはできるし、それまで見えてなかったことが見えるようになる。時間がかかりますけどね。だから、向いていなかったとしても大丈夫なんだと思うようになりました。口頭で伝えられた有名で雄弁な伝承を調査する時、多くの人は有名な語り手のところに行くような形で調査をしています。私はそういうふうには調査をしていません。すよ。たまたま自分が仲良くなつた家族のおばあちゃんが物語を知っているから、そのおばあちゃん

「影響を与えている」というより、都市化が進んで大規模な社会を営むようになって、時間を通して積み重ねられてきた習慣のようなものが失われずに現代の生活の中に残っている。その度合いがアンデス高地の社会では大きいのだと思います。街や都市での生活においても、ある種のコミュニティの習慣や共同体的な振る舞いが切り離されないままで残っているんじゃないかな。ラパスという街はボリビアの行政上の首都でありながら、バスに乗る時に他の乗客に挨拶をする習慣が今でも結構残っています。

——社会構造の変化によって、習慣が残っていく場合と変わってしまったような違いが生まれるのはなぜでしょうか。

細かく分析したことはないですが、最低限の社会関係を維持するための振る舞いとして、挨拶は残

んから物語を聞いて録音をして、少しずつ物語を公開していく、そういうふうには仕事をします。家事の手伝いをしながら、その合間の邪魔にならない時に話を聞かせてもらうとか。すごく労力のかかる、効率が悪いやり方のようにも見えるのですが、それでも今までできているんですよ。

子どもたちが私に慣れてくれると、私が何を必要としているのかを察してくれて、私の知りたいことを子どもたちが親戚の人に聞いてくれたり、一緒に聞きに行ってくれたりもします。

家族の生活を邪魔しない範囲で、いろいろと物語を聞かせてもらい、家族の記録としても残す。家族の様々な世代にとっていいことが、自分の調査とあんまり矛盾しないようになることを心掛けています。時間がかかるけど、ずっとやっていくと少しずつ形はできてくる。そのことが二十代の頃は分からなかったのに、暗中模索していました。でも、三十代が終わる頃から少しずつそう

りやすかったのかもしれない。日本でも、山道ですれ違う時に挨拶をしますよね。それは、お互いに敵じゃないということを確認するための行為なんだと思います。

でも、スペインにおいても、都市の生活に馴染むにつれて、先住民の言葉の世界からスペイン語へと生活の言語が移っていき、徐々に人の生活パターンや振る舞い方が変わっていくことは確実にあります。街に住んでいる先住民出身の人と、もう少し村の方に生活の基盤を置いて街と村を行ったり来たりしながら暮らしているような人との間には、確かな隔たりがあります。それでも、双方の間に何かしらの社会的な繋がりが、連続性が維持されていることが面白いなと思います。

挨拶をする社会としない社会は、何を共通の前提としながら社会生活を営んでいるかがちよつと違うのかもしれない。

——藤田先生にとって暮らしや生活とは何でしょうか。

概念を定義しようとするのではなく、私の実感としてお答えしてみます。常にそこにあるもの、確かにやらないこと、具体的な、確実に毎日あるわけですよ。果樹やトウモロコシの灌漑をしないといけないし、時期が来たら畑を起こして種まきをしなさいといけません。また、常に灌漑用水に水が流れているわけではないので、灌漑用水が流れている時間を見計らって水を畑に引き込みにいかないといけない。街や複数の村の間を行ったり来たりしないといけない。その「やらなきゃいけないこと」のサイクルが、暮らしとか生活だと思っています。

研究として研究をさせてもら

●「向いていなくても大丈夫」と思えたフィールドワーク
——どのような経緯で研究者の道を歩み始めましたか。

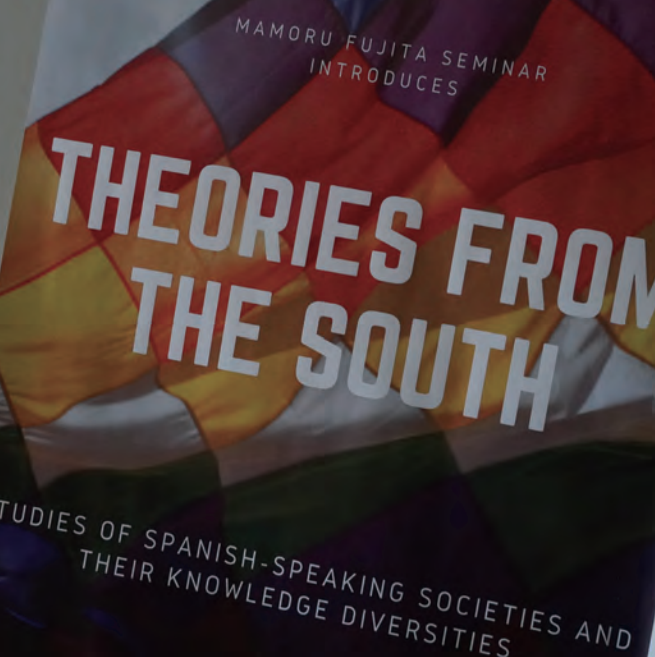
これは人によって、いくつかのパターンがあると思います。例えばフィールドワークをするような研究者の中でも、ある年数が経つごとにフィールドを移っていく人もいます。五年とか十年ごとにフィールドを変えて新しい場所で仕事をしていくような人もいます。仕事をする場合もそうですよね。一つの国で、現地採用のような形でその国に根差して仕事をする人、もしあれば、いろいろな国を転々としながら仕事をしていく人もいます。

二十代半ばでそのような選択を迫られた時、やっぱり私は様々な国や社会を転々としていくよりは、同じところに行き続けたいなと思えました。一番それができそうだったので、研究者になりました。研究者は自分のテーマは自分で決め

う時は、できるだけその「やらなきゃいけないこと」がある中でそれを邪魔せずに、うまく乗っかるような形で調査ができるようになる、と考えています。どちらかというと、暮らしや生活は定義するものというよりは、確実に一人ひとりにとつても、一つひとつの家族にとつても、常にそこにあるものなのかな、と思います。

しかし少し見方を変えてみると、そこにあつた生活を積み重ねるだけでは人生にならないという側面もあるかもしれません。自分の人生を生きていくために何かを変えようとするのなら、やはり普段の生活を繰り返しているだけでは大きな変化は望めない。

自分の生活とは少しレベルの違うところであっても、子どもたちには街の中心の方にある良い学校に行つてほしいと願って少々無理のある生活を送るということは、フィールドにしている社会でもよく目にすることです。普段の生活を営みながら、何かしらその次に行こうとして多か



研究室の様子



——ありがとうございました。
(構成：荒井美海)

注1 アイマラ語：ボリビア、ペルー、チリの南アメリカ・アンデス高原部で話されている言語。
注2 ケチュア語：コロンビア南部、エクアドル、ペルー、ボリビア、アルゼンチン北部等の南アメリカで話されている言語。

れ少なけれ無理をしているということとは、それぞれの人に常にあることなのではないかなというふうに思います。

ただ、アンデスの人々は一般的に、キャリアと家族のどちらを大事にするかと考えた時、家族を大事にすることが多いということは分かっています。かなければなりません。我々にとっては意外と思えるほど、家族のためにキャリアの機会を取らないということがあったりする。逆に言えば、華々しいキャリアを辿っていないなくても、ものすごく能力があったり、いろいろなことがよく分かっていたりする人もいるわけで、その点は常に留意したいと思っています。



藤田 護
(ふじた・まもる)

環境情報学部専任講師。
専門はラテンアメリカ研究（特にアンデス諸国）、言語人類学、アイヌ語とアイヌ語口承文学。

- ① アンデス高地の渓谷部のサパーキ村。
- ② メカパカ村の祭りでもレナーダという踊りを踊っているところ。
- ③ かまどでクイの丸焼きを作っているところ。アンデス高地のご馳走。
- ④ アンデス高地ではトウガラシを石ですり潰したペーストが料理の味の土台となる。ここではトマトと香草と合わせて「リャフワ」と呼ばれる万能調味料を作っている。



藤田先生のある1日 —フィールドでの1日—

- 5:30 ● 家族の人たちが宿に迎えに来る。
- 6:30 ● 町の市場で、村の人たちに持っていくための果物・パン・鶏肉などを買い込む。
- 8:30 ● 途中の町で休憩して朝食をみんなで（家族の人と一緒に）食べる。
- 10:00 ● 家族の親戚の家に着く。雑談をしながら、昔の話を聞かせてもらう。
- ジャガイモの育ち具合を確認しに、畑を見て回る。
- 12:30 ● 昼飯。
- 13:30 ● 家族が持っている土地をみんなで見て回る。薪になるような灌木の刈り取りと運搬を手伝う。
- 16:00 ● 村を出て、街に戻る。
- 20:00 ● 宿に戻ってその日の記録を見返して整理をする。

家に住む、 まちに住む

中川 エリカ

私たちは建物やまちと共に暮らしている。もしかしたら、私たちの生活は建物やまちによって影響を受けているかもしれない。今年度SFCに着任し、授業「デザインスタジオ(住まいと環境)」を担当する建築家の中川エリカ先生にお話を伺った。



さんによろしく。家について、かかと質問すると、家の中に関する要望がたくさん出ます。けれども、敷地を選ぶ時は、他の敷地と比較しながら、いろいろなことを考えて購入するはずで、最初からひとつに絞っている人はほほいしないでしょ。駅から徒歩どのくらいで着くのか、小学校の学区はどのようになるのかということに加えて、「このまちの雰囲気が好きだ」という思いもあるのではないのでしょうか。はっきりと言葉には表れていないけれども、話をしながらそのような思いを読み解いていくと、お施主さんが本当に惹かれていたものが何か分かることがあります。家を建てる時は、そこに何十年も住むと考えると、そこに何十年も住むから、住居そのものだけではなく、常にまちを見るようにしています。

——建築物の設計を通して、社会問題を解決しようと試みたことはありますか。

「解決するぞ!」と最初から思っていた訳ではありませんが、結果的に問題解決や社会貢献に繋がった事例はあります。例えば、人が集まる場所を作る目的で、「ヨコハマアパートメント」という木造賃貸アパートを共同設計したことがあります。もちろん人が集まれば良いなと思っていましたが、この建物で社会を変えたいと考えていたわけではありません。ですが、竣工後しばらくして、東日本大震災が起こりました。その時、若者がたくさん住んでいるこのアパートのことを知っていたご高齢の方々が、「あそこに行けば若い人がいるぞ」と集まってきたそうです。今振り返ると、まちが高齢化しているという問題に対して少し貢献できたのかなと、嬉しく感じますね。現在の価値観や課題だけに目を奪われていると、未知の問題が出てきた時に対応することができません。「未知の建築を作るぞ!」まだ誰もやっていないものを作る

●人々の生活に影響を与える建築設計
——建築物は人々の生活に影響を与えると、思いますか。

確実に与えますね。どのような建築環境で生まれ育ったかにより、人の性格は変わります。住宅を建てるお施主さんと話をしていると、どのような生活を送っていききたいかなど、暮らし方に対する思いを持っていることが分かります。どのような家を建てたいかということと伺っているうちに、将来的にしたいことやその人となりなど、物に留まらないお施主さんの思いが見えてきます。やはり建築物は、そこに住む人の生活に確実に影響を与えていると思います。

——理想的な将来の暮らしに近づけるために、設計の際に意識していることはありますか。

例えば住宅の場合、まずお施主



——実際に設計する際に最初に取り組むことは何ですか。

「ぞ!」と思い、取り組んでいるうちに、知らない課題が起こった時にも対応できたりする。「ヨコハマアパートメント」はそのような例だと思っています。

——模型です。今この事務所の中には、大小様々な模型がたくさんあるのが見えますよね。これが中川建築事務所での私の日常になっています。模型を作りながら立体的

に考えていくことの強みは、パースとは違い、いろいろな角度から見られるということです。これはとても重要です。パースの場合、ひとつの角度に決めた上で作り込んでいくというプロセスなので、どちらかというと、プレゼンテーションに特化しているものです。模型は、私にとって設計のツールです。いろいろな角度から見ると、建物がまちと合っているか合っていないかが分かるんですね。まだ言葉にしにくい良さを見つけられたとしたら、それはやはり未

知の良さだと思えます。そういう点で、模型は自分のやりたいことに合っているし、私の性格ともおそらく合っている。ありがたいことに、事務所のスタッフもみんな模型が好きで取り組んでくれているので、仕事の環境に恵まれます。

——かなり細かなところまで人の暮らしぶりが感じられる模型ですが、材料はどのように選定しているのでしょうか。

建築家や建築系の学生は、模型材料としてスチレンボードを使うのが一般的ですが、中川事務所ではスチレンボードは一切使っていません。買ったことすらないのではないかな。スチレンボードは案外高いし、光をうつすらと通してしまい、実際より少しいい感じに見えてしまいます。こういった点から、スチレンボードではなく、光を通さない材料で作ることを徹

底しています。例えば瓦の模型であれば、本物の瓦のように作られた材料があります。ただ、瓦ひとつでも、それがプロジェクトに合っているかということを考えるようにしています。例えば、ストローの曲がついているギザギザのところを色を塗ったら瓦に見えたから、それを瓦として使うとか。必ずしもその部品の模型材料を使うのではなく、通常とは違う使い方方で模型材料に転用することがあります。そういう意味で、身近なものをよく使いますし、百均にあるようなものも活用しています。

——模型と先生ご自身の生活は密接に関わっているんですね。最終的な建物は設計する際に想像しているのでしょうか。

このような建物だといいなと最初からイメージを定めて作るわけではなく、模型を更新しながら設計し続けていきます。常に暫定一

位を更新し続けていくような道筋です。作っているうちにだんだんとこれがいいのではないのかという形が分かってきて、その部分を念入りにスタディ³するという流れで進めています。最初から何をスタディした方がいいかは決まっています。暗闇を延々突き進むみたいな感じはありますね(笑)。

——先生にとって人々の暮らしをより豊かにする建物はどのようなものなのでしょうか。

住む人が「その家にいると健康になれる」ことは重要だと思います。暮らしが抑圧されている感じがすると嫌ですよね。健康というのはもちろん病気になるというふうな意味がありますが、家に帰ると思わずホッとすると、肩の荷が下りるような感覚がするのは、その家の「空間の力」です。実際、人の心を解きほぐすような建築はあります。「桃山ハウス」⁴

のお施主さんにもおっしゃっていただいたように、人々をいろいろな意味で健康にするというのは大事なことだと思います。その上で、やはり家を使いたいように使えることも重要です。でも、この二つのことをどちらも満たすのは結構難しい。例えば2LDKの家に住んでいると、寝る場所や食べる場所は限られ、毎日の生活がほとんどルーティン化してしまいます。できることなら、部屋に入ってくる光や室温の変化に合わせて、その都度、家の中の好きな環境を探して好きなことをしたいですよね。

それができるようにになると、気分が晴れます。そういうものが、ものすごく大まかに一言で言えば健康になれる建物ではないかと思えます。

——先生の建築に対する情熱を教えてください。

まずは、建築が好きだということ

とです。設計は本当に大変なんです。でも、私は実際長いこと建築を続けている。それは好きだからだと思えます。私の事務所では、大きい模型を作ります。もちろん私一人で作っている訳ではありません。今はスタッフの人が作ってくれていて、そのような環境で設計することができるのはすごく恵まれていることです。設計するところがそもそも好きで、仕事の環境にも恵まれていて、続けない理由がないから建築をしています。

●家探しをする上で重要なこと

——大学生が一人暮らしやシェアハウスをする時、家賃を安く抑えるために、いろいろな条件を諦めることも多いようです。中川先生が大学生だとしたら、賃貸物件を選ぶ際に優先する条件は何ですか。

多くの賃貸物件の家賃は駅からの距離で決まります。SFCは駅から遠いからです。逆にいろいろ

な尺度があるでしょう。私だったら、部屋だけでなく、まちを含めた環境を見ますね。他にも、この道を歩きたいとか、このカフェに行きたいとか。私たちはまちの中の家に住んでいますし、家はまちに「住んで」います。そのような意味で、まちを見て決めるだろうと思います。

——中川先生が好きだと思いうちに共通点があれば教えてください。

同じ建物がずっと並んでいる、コピー&ペーストのようなまちは嫌ですね。そのまちの独自の文化や雰囲気がある所が好きです。私がおもいSFCの学生だったら、比較的チェーン店が多く、他のまちでも代わりができてしまうような雰囲気がある駅前の場所は選ばないと思います。でも、駅から少し離れてまちのことをもっと深く知れば、神社等の独自の文化があるに違いありません。そのようなエ

リアがあれば素敵だなと思います。

●中川先生の生活と新たな環境による影響

——ご自身の生活について伺います。中川先生は建築家ですから、ご自身の生活空間もデザインされたり、設計されたりしているのでしょうか。

意外に思われるかもしれないけれど、全然していません。この私の場合、夫も建築の設計をしているので、もし自分の家を作るとしたら、夫に依頼します。建築の設計をしていて面白いと思うのは、お施主さんの要望を聞きながら仕事を進めていると、その方自身も意識していなかったことが分かってくるということです。だから、私の生活空間を他の人に設計してもらえば、私自身が気づいていなかったことを知る機会になるはずです。そのこととても興味があ

ります。

——SFCにご着任されてから、ライフスタイルはどのように変化しましたか。

週に何日かSFCに行くようになり、事務所や家、子育てなどのことについて変化がありました。私の事務所や自宅がある東京とは違い、緑がたくさんあるSFCのランドスケープ⁵は本当に財産だと思います。週に何日か、特に「森アトリエ」⁶で多くの時間を過ごしていますが、隣がテニスコートだし、まるで軽井沢にきたような感覚です。SFCに通うようになり、都心とランドスケープ的な自然という二つの違う環境を一週間のうちに経験できるようになったことは、設計にとってもプラスになりました。

(構成・福原衣織)



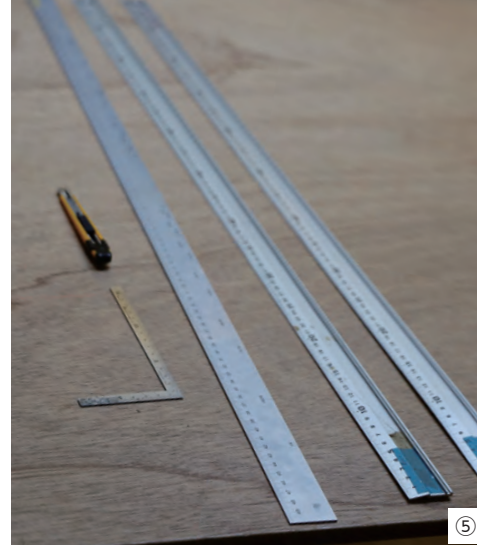
②



③



④



⑤



⑥



①



中川 エリカ (なかがわ・えりか)

政策・メディア研究科専任講師。
専門は、建築設計および建築に関連したデザイン全般とまちづくり。

- 注1 「ヨコハマアパートメント」…西田司氏と中川エリカ先生による設計のもと神奈川県横浜市に二〇〇九年に竣工。
- 注2 パース…建物の外観や室内を立体的な絵にしたもの。
- 注3 スタディ…建築設計における検討案もしくは検討する行為そのものこと。
- 注4 「桃山ハウス」…二〇一六年に静岡県に竣工した中川エリカ先生独立後の第一作。二〇一七年には建築住宅賞金賞を受賞。
- 注5 ランドスケープ…景観や風景、景色を意味する言葉で、建築物やその集まり。周辺の空間や自然環境なども含めた眺めのことを指す。
- 注6 「森アトリエ」…建築系の研究室（現在は、松川昌平研究会、鳴川肇研究会、中川エリカ研究会）が集まる、デザイン棟のひとつ。

- ① 事務所にはずらっと大きな模型が並び、設計中の建物の模型が中央に広げられていた。
- ② 模型を置く台と同じ構造体で作られた長椅子に座らせてもらった。
- ③ 直角を確認したりするのに使うスコヤ。
- ④ 建築模型の作成には、刃が30度のカッターが使われる。
- ⑤ 他の設計事務所には何本もないという1mの金尺。大きな模型を作る中川事務所には手が届く所に何本も。
- ⑥ お湯がすぐに沸く平たいやかん。

中川先生のある1日 —SFCに行く日—

- 7:00 ● 起床。
- 9:00 ● 朝食の後、自宅を出発。
- 9:30 ● 事務所に到着。メールの確認などをする。
- 10:00 ● 打ち合わせ。模型の確認。
- 16:00 ● 事務所を出発し、SFCに向かう。
- 17:00 ● 大学院（政策・メディア研究科）の授業でレビュー。
- 22:00 ● SFCを出発。
- 23:00 ● 帰宅。

「理想的」でなくても

永田 智子

生活は一筋縄ではいかない。それならば、生活の中でなされる在宅看護にはどのような難しさがあるのだろうか。看護医療学部で在宅看護を専門にされている永田智子先生に、在宅看護実習棟にてお話を伺った。

●在宅看護に興味を持ったきっかけ
先生ご自身の中で在宅看護や地域看護がテーマになった経緯をお聞かせください。

もともと看護師を目指していたわけではなく、東京大学医学部保健学科(当時)在学中に看護の奥深さに気がつきました。大学卒業後、大病院で看護師として働きました。私が勤務していた悪性腫瘍や心臓疾患の病棟では、完治して退院される方は少なく、治療を終えて一旦退院し、次の治療の関係で再度入院するというように、入退院を繰り返される方が多いのが特徴でした。そういった患者さんに対して看護を行っているうちに、家でどんな生活を送られているのだろうか、家に帰った時の生活は充実しているのだろうか、まだ病気が完全に治っていない状態での家での暮らしはどのようなものだろうか、在宅での看護に関心を持つようになりました。そこ

で、四年間の勤務の後、東京大学大学院で地域看護学分野の研究をすることにしました。当時は自治体や区役所によって訪問看護が行われており、そこでアルバイトをしながら、在宅看護や地域看護について学びました。

——現在も、看護医療学部で教鞭を執りながら、訪問看護ステーションや病院にも足を運んでおられます。大学以外の場ではどのようなことをされているのでしょうか。

私が今大切にしているテーマの一つは、ある療養場所から別の場所に移るという「移行期ケア」です。移行期ケアといえば、小児向けの治療から成人向けの治療へと移行する際のケアを指すこともありませんが、私が関心を向けているのは、場所を移す時のケアです。療養場所が変わる際には、患者さんの情報やケア作業を引き継ぐ必要があります、ケアの体制が異なる中でどの

いうように、退院後をイメージして在宅看護の準備もしやすかったですね。それがなかなかできなかった中で病院側がどのような工夫をしているのかといったことを調査しました。

——確かに、患者さんの今の様子を実際に見ることができるとかどうかによって、これから看護をする人の準備や判断はだいぶ変わると思えます。

●人の数だけ生活があるように、人の数だけ在宅看護がある

——明確な期限や決まりがない「生活」の中にあるからこそ、理想通りにはいかない在宅看護の現実もあるのでしょうか。

その辺りは非常に深く、複雑な部分です。そもそも「理想の暮らし」って人によって本当に違いますよね。朝何時に起きるのか、朝ご飯をどうやって食べるのか。家

ように引き継ぐのが重要な課題となります。例えば、病院ではできていた患者さんのケアを、退院後も家で同じように続けられるとは限りませんよね。そこで、どのようなサポートがあれば、様々なサービスを活用しながら看護を継続していけるかが課題になるわけです。

病院の退院支援部門を訪れて看護師さんに話を聞かせてもらったり、実際の退院支援を見せてもらったり、現場と頻繁にやり取りしながら必要な研究や調査をしています。

最近では、コロナ禍での面会制限によって、患者さんのご家族が退院後のイメージをしにくくなったということが分かりました。本当だったら、前より具合が悪くなっているとか、歩くのが難しそうだとか、患者さんの実際の様子は面会で知ることができました。「こんなに歩きにくそうなら、家に手すりを付けないといけないかな」と

族と一緒に食べるのが楽しい人もいれば、一人で気ままに好きなものを食べるのがいい人もいます。そういうのって、元気に暮らしている皆さんもそれぞれだと思うんです。飲み会にはあまり行きたくない人もいれば、飲み会が大好きな人もいますよね。在宅療養をされている方もそれは同じで、それぞれ違う望みを持っておられます。

棟のように、綺麗で広くて整っていて、バリアフリーな家で暮らせたら、それはもちろん「理想的」だと思えますよ。でも、中には、エレベーターがないアパートの三階に住み続けたい人もいます。杖をついて上り下りするのがやっとなので、段差もたくさんあって、空調も整っていないような家だと、医療職や看護の立場からすると「改善した方がいいだろう」と思うけれど、それまで築いてきた生活歴、家族の歴史、その人が大事にしていることを無視して押し付けるわけに



はいきません。医学的な観点から見て「理想的」と言われるような環境ではなくても、その方の望む暮らしに少しでも近づけていく支援をしていくことが在宅看護の大変な部分です。でも、同時に、それが面白さでもあって、そこに柔軟に対応できる人が在宅看護に向いているのではないかと思っています。「こんな場所でも、大事にしているものがあって、なんとか暮らしているものなんだな」って。

実際、結構なんとかするんですよ。身体の不具合や暮らしにくい環境ともうまく折り合いをつけていくんです。好きな家で暮らすためなら、ちよつと危なっかしくても手すりに掴まりながら頑張ったり移動したり。一人暮らしで身寄りもなくて、退院後の生活を心配していた人が、いざ自宅に帰ってみると、実はずっと気に掛けてくれていた近所の友だちがいて、買い物を手伝ってくれていたり。病院でもご家族や知り合いの情

報を尋ねることはありますが、それだけでは見えてこなかった本人のコミュニケーションや交流が実はあって、それに生活が支えられていることも気づかれます。

——在宅で療養生活を送る場合、一緒に住む側は在宅療養を自分の生活に組み込み、自分の生活を変えていく必要があります。例えば家族であるという理由で、それは簡単なことだと思ってしまうがちよつと難しいケースもあるのではないのでしょうか。

むしろ、難しいことの方が多いかもしれないですね。家族の歴史や関係性は、それぞれに築いてきたものがあります。配偶者などから、親なのだから、当然介護できるといふわけではありません。関係性の問題だけではなく、迎える側の身体的な能力、あるいは認知機能的能力も考慮する必要があります。

の役割についてどうお考えですか。

慣れ親しんだ家族や同居人によるケアには、継続的に介護できるというメリットがある一方で、密室を作り出してしまふ危険もあります。家族だけで大丈夫だと思っていたら、実は介護の負担がだんだんと重くなっていて、誰も気づけないまま、最終的に悲しい事件が起きてしまうこともあります。また、自分では「うまくできている」と思っている、専門家から見ると適切ではないケアを続けてしまふ可能性もあります。

その点、専門家である看護師や介護士は、エビデンスに基づき、質が担保されたケアを提供できるというメリットがあります。一方で、四六時中、継続して様子を見守ることはできません。また、必要なケアに合わせて、異なる分野の介護士や看護師、さらには理学療法士や医師までが関わる場合、それぞれの専門領域でケアは行え

家族関係を把握するために手始めに書くジェノグラムと呼ばれる関係図は、家系図のようなものです。そこで詳しい情報が得られないと、家族や同居している人、血縁上近い関係の人を介護者として推定しがちですが、実際には「同居しているこの人は仕事が忙しくて時間がない」だとか、「配偶者の方は持病を持っておられる」といった具体的な事情や状況があります。

シーソーのような図を用いて考えると分かりやすいです。片方には、退院後に予測される介護量、反対側には、ご家族や近くの方が提供できる介護量。そのバランスが取れない時には、必要な介護量を少しでも減らせるように工夫したり、介護を一部任せられるサービスを検討したりします。

さらに言えば、経済的な状況も必ず考慮すべき重要なポイントです。介護負担を減らすサービスも、使い放題というわけにはいきません。人の数だけケースがあるので、

なんとかバランスを取りながら、丁寧に調整していきます。

●家を見て、生活を知る

——看護が必要な人自身の望みや人間関係、また、家族ごとに異なる事情を丁寧に汲み取っていくことが非常に重要なのだと分かりました。そのためには、実際に生活を見せようというところが一番有効な手段なのではないでしょうか。

そうだと思います。家に入ることができるといふ点で、在宅看護という仕事はある意味で有利かもしれません。家には、その人について知るための情報源がものすごくたくさんあるからです。もちろん、まずは信頼関係を築いて、「この人なら家に入れても大丈夫」と思ってもらわなくてはなりません。何を食べて、どういう場所です生活している、どんなものを置いているのか。その人やご家族が大切にしていることを掴むためのヒ

でも、専門職間の連携が取れていないという課題もあります。

ケアの量が増え、看護が大変になる前に、丁寧に役割分担を考えていくことが大切です。身体の状態や治療段階によってケアは変わっていくものです。ですから、家族によるケアを減らして医療関係者や介護関係者によるケアを増やしたり、その逆にしたり、求められるケアの量や内容に応じて役割分担の比率を潤滑にスライドさせながら調整していけるような協力関係を築くことを目指しています。

●在宅看護の可能性

——在宅看護は、一緒に生活を送るということですから、看護する人とされる人という関係を超え、互いに影響を与え合うのだらうと思います。がいかがですか。

先ほどお話しした「在宅看護論」の授業では、初めにあるDVDを

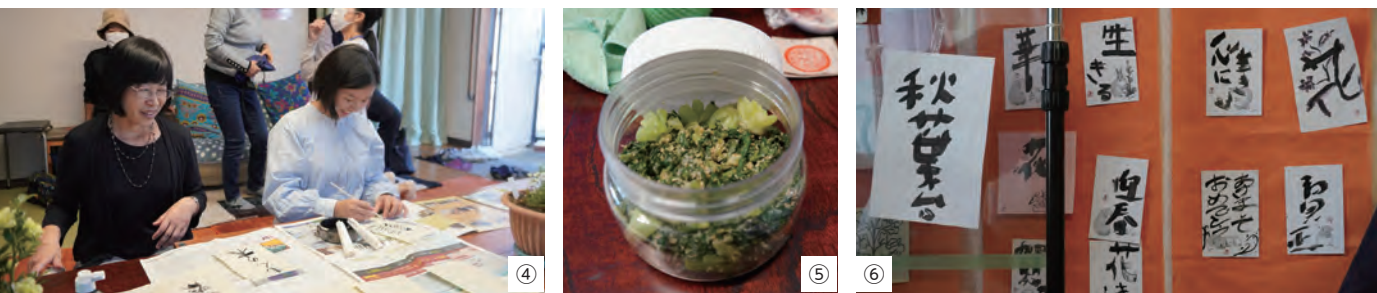
ントが詰まっています。

ご自身の強みや希望を少しずつ解きほぐし、尊重しながら、生活を共に組み立てていく。医療的な手当をお手伝いしたり、健康面のアドバイスをしたりしつつ、ご自身で少しでもうまく生活を調整していけるようにサポートするということが医療職としてできることかなと思っています。「看護師は病棟で働く」というイメージを持って入学する学生も少なくありませんが、病院で見聞きするだけだと見えづらい部分も多いですから、家での看護がどのようなものなのかを学生や病院の看護師の方々に伝えていくのが今の私の仕事です。

●医療職として

——自分の生活として看護に関わる家族や看護者とは違い、看護師は、仕事として一定の距離を持って看護に携わるのではないかと思います。完全に距離を縮めない、あるいは、縮められないからこそ担える看護師

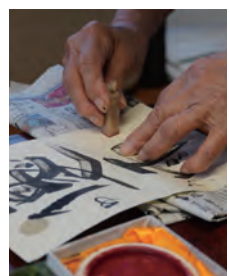
学生に見せています。映像の中で、筋萎縮性側索硬化症(以下、ALS)を患う男性が、パソコンを使ったコミュニケーションツールによって印象的な語りをされているシーンがあります。「甘ったれ」だった奥さんが、自分が病気になるまでから強くなった。奥さんがいろいろ心配してくれて、サービスも調べて取り入れてくれて、彼女は強くなった。そんな奥さんを見て、「この家族を守るのは私だ」という思いをさらに強くした」と語られています。身体はもう動かないけれども、だからと言って「守られる人」になるのではなく、ご家族の中での立ち位置や役割を持っていらっしやる。そして、介護が必要になったとしてもその役割がなくなるわけではなく、むしろ、精神的支柱で在り続けようとする思いをより強くされている。その姿が非常に印象的でした。病気で動けなかったとしても「おかえり」と言うだとか、ただ家族の真ん中



- ① ドアは開けっ放しで、自由に人が出入りしていた。
- ② ごまがある柿は甘いのだと教えてもらった。
- ③ 紙コップには自分の名前を。
- ④ 永田先生と編集委員も習字をした。
- ⑤ 大根の葉の胡麻和え。「本当に美味しいのよ。食べてみて！」
- ⑥ もんのきの家に集まった人たちが書いた作品。
- ⑦ 習字を覚えてくれたのも、もんのきの家に集まるメンバーの一人。習字道具の入った箱から落款印を探してくれている。



取材の後、永田先生と共に「もんのきの家」を訪問した。「在宅看護においても、近くに相談できる場所やほっとできる場所があることがとても大事。こういう場所が継続していくための支援ができればなと思ひながら関わっています。」



にいるだとか、その方の存在自体から周りに与えられるものが必ずあると思います。

専門的にも、ソーシャルサポートに互酬性がなければ、サポートを受ける側にはむしろネガティブな気持ちが生じることがあると言われてます。家庭や社会の中でもともと持っていた役割を果たせなくなるということは、人に大きな喪失感を与えます。看護や介護をする際は、療養者さんがもともと持っていた役割を認識し、ケアを受けながらでもできることを一緒に考えていく姿勢が大切だと考えています。

——今の社会は、家族や地域の繋がりが薄いと言われます。先生のお話を伺っていると、日常生活を送るために看護や介護が必要であることによって、閉じた個人の生活が開かれていき、社会での繋がりが取り戻されていく可能性も感じられました。

そうですね。先ほど話に出たA

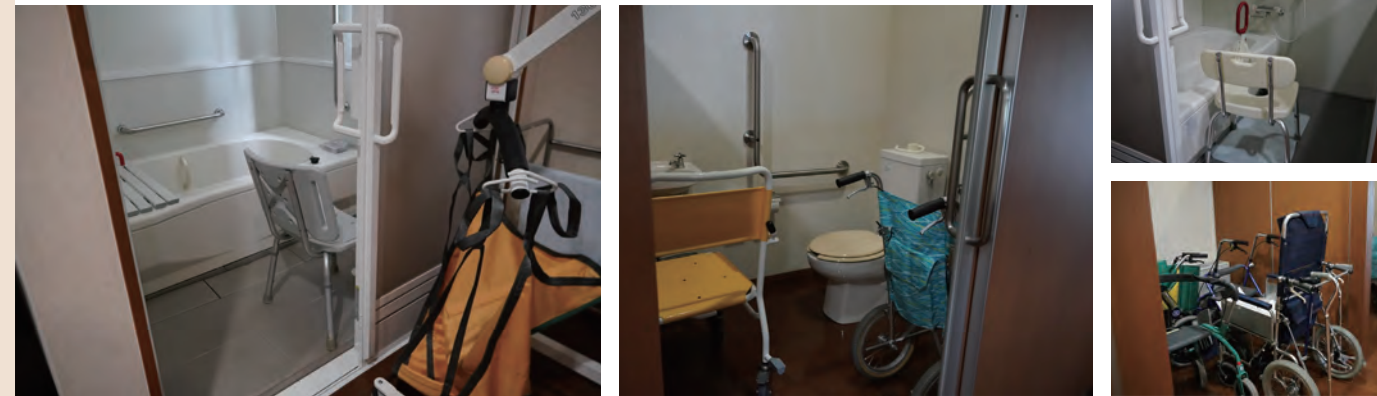
LSの彼は、複数の訪問看護ステーションから看護師を送ってもらい、さらにヘルパーの助けも借りながら生活を送っており、そのことを「社会と繋がっている」と捉えておられます。

一方で、たくさん見知らぬ人が自宅を訪問することに、今までの平穏な生活が脅かされるような思いを持たれるご家庭もあります。必要に応じて頼ってもらえるよう、地域包括支援センターや病院の退院支援部門、あるいは外来といった、通院時や入院時から既に患者さんの良き相談相手となっている窓口と連携を取りつつ、丁寧な信頼関係を築く必要があります。

在宅看護をきっかけに、今まで会ったことのない人に出会ったり、離れて住んでいる親族と久しぶりに連絡を取ったりすることもあるでしょう。大変なことはたくさんありますが、新しいことが始まるチャンスになるかもしれませんね。

(構成・松本こころ)

看護医療学部の在宅看護実習棟。実習のための施設だが、実際に生活を送れるほどの家具や設備が整っている。

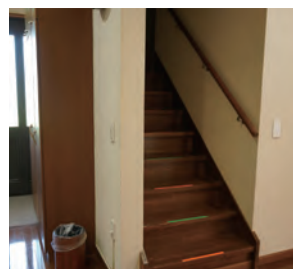


永田先生のある1日 —取材と出張があった日—

- 5:30 ● 起床。自然と目が覚める。家事を済ませ、朝食をとる。
- 6:30 ● キャンパスへ移動。
- ~ 8:30
- 9:25 ● 1限から授業。
- 11:00 ● KEIO SFC REVIEWの取材を受ける。
- ~12:00
- 13:00 ● 取材を兼ねて、遠藤地域の縁側「もんのきの家」を訪問。
- 14:00 ● 看護医療学部の自室でオンラインミーティング。
- 19:00 ● 甲府へ出張。夕食を食べながら移動する。
- ~22:00
- 23:30 ● ホテルで就寝。

永田 智子
(ながた・さとこ)

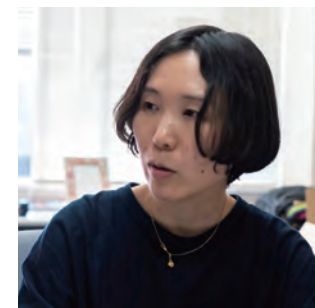
看護医療学部教授。
専門は在宅看護学。



少しずつ、 変わるはず

塚原沙智子研究会

ウォーターサーバー、リターナブル容器、ゴミステーション(図1)に電気スイッチ横のポスター(図2)……。キャンパス内のこのような変化にお気づきだろうか。仕掛けているのは、環境問題と生活を切り離すことなく、「足もと」から変化をもたらすことを大切にしている塚原沙智子研究会だ。キャンパスに表出した取り組みの裏にはどのような思いや経緯があるのか、研究会に所属する3名の学生を交えて塚原先生にお話を伺った。



塚原 沙智子



市川 美優



曾根 直樹



バーン 杏雅愛

● 環境問題への多様な入り口

——塚原沙智子研究会(以下、塚原研)では、身近なところから変化を起こしていく取り組みをされていますが、いつ、どのようにして地球環境問題が自分にとって重要な問題となったのですか。

曾根直樹さん(以下、曾根) 東日本大震災での経験をきっかけに、電気やエネルギーの問題に興味を持ち始めました。小学五年生だった当時、僕の住んでいた神奈川県では計画停電が行われました。人生で初めて電気が使わずに暮らしてみても、電気がない暮らしがどんなに不便なのかを知りました。その後、理科の教科書に載っていた化石燃料の可採年数に関するコラムを読み、「あれ、電気ってずっと使えるわけじゃないんだ」と危機感を抱きました。

塚原沙智子先生(以下、塚原) もともと曾根さんは、「原子力発電を

もっと使うべきだ」という思いで研究会を志望したんですよね。私は原発を推進していいので、果たして曾根さんの問題意識に込められるのだろうかと思いつつ、まずは福島県原発事故の除染の現場を見学してもらいました。環境省事業の一環で、毎年数名の学生を派遣しているんです。

曾根 浪江町の町長さんと話したり、農家さんに風評被害についての話を直接聞いたりして、原子力発電が良いとは言えないなと思いました。その後、エネルギーに関する勉強を重ね、卒業後は再生可能エネルギー事業などを手掛ける企業で働くことになりました。

バーン杏雅愛さん(以下、バーン) 私は大学に入学してから「Fridays For Future」の日本支部に入ってみたり、衣服のフリーマーケットを開催したりするなど、実際に行動を起こしてみたことで、地球

環境問題をより自分のこととして捉えられるようになりました。もともと、中高生の頃から自然と環境問題に関心を持っていました。それはなぜなのかと問われると分



図1



図2

からないけれど、特に意識しなくても、いろいろな情報が自然と耳に入ってきていました。気候変動に関しては、学べば学ぶほど抱く、能天気ではいられないという思いが行動力に繋がっています。

市川美優さん(以下、市川) 昔から海や川とそこに住む生き物が大好きで、特に海洋プラスチックごみの問題に関心を持っています。小さい頃は、よく川に入っては生き物を観察していました。ダイビングは趣味としてずっと続けていて、大学入学後はライフセービングもしています。水族館の年間パスポートも持っています。

塚原 生き物が好きな人は多いですよ。一ノ瀬友博先生(環境情報学部教授)の研究会と塚原研の両方に入っている人もいます。生き物の生息環境をどう守ればいいのかも学びたいと。

私が自分の専門として環境問題に

興味を持ったのは、一九九〇年代。環境問題が、公害のような地域の問題としてだけでなく、グローバルな問題として取り扱われた時代でした。地球環境問題に関する国際条約が結ばれるようになり、一九九七年、日本でも気候変動に関して京都議定書という国際協定が取り決められました。それをニュースで見ても、「なんかカッコいいな」と思った。それがきっかけです。

一同 全然知らなかった!

塚原 グローバルな問題は国際会議で話し合わなければ解決できないですし、そこで活躍できたらカッコいいじゃないですか。そういう人材になりたいと思ったんです。環境問題への意識はもともと持っていました。高校時代はごみの分別にうるさい「分別番長」でしたよ(笑)。それでも、「身近にある小さなことしかできないな」と感じていたところ、

ニュースで国際的な問題として環境

問題が報道されるのを見て、国際合意をまとめられるような人材が日本からも生まれる必要があると思いました。環境省に入ってから、「国際問題を担当したい!」という希望も叶い、気候変動や廃棄物の分野で国際交渉の場も経験しました。しかし、現場の実態に基づかない議論も多かった。現場の状況も知らずに議論なんてできないではないかと思いついて、現場重視の行政官を志したいと思いました。

市川 現場を知らない人が話しかっているなんて怖い。

塚原 もちろん、国の中枢には現場からたくさんの方が集まっています。ですが、多忙でもあり実際に現場を歩いている人は多くはありません。それは会議に集まる各国の交渉官も同じで、「現場ではこうなっているんだよ」と言うと、それだけで説得力があり、交渉をリードでき

ることもありません。まずは現場を知り、そこで見聞きしたことを分析し、対策に取り組んだ実績に基づいて、国際的な議論がなされるべきではないかと思っています。SFCでやっていることも同じです。環境問題は偉そうに論じるだけだと相手に忌避感を与えてしまう。自分で実態を調べて分析して説明する。そうすれば、手触り感のある議論に落とし込むことができると思います。

●「こっちにしなければならぬ」ではなく「こっちがいい」

——環境問題を自分の生活に関係する問題だと捉えられるようになるためには、どのようなことが重要だと思いますか。

市川 自分の目で見ることが大切なのかな。ダイビングをしに海へ行くと、近くの海でも意外とたくさんのごみを目にします。実は、海底に

沈んだタイヤの中には魚の住処になっているものもあります。実際に見ることで、問題を知ることができると同時に、「ごみだったものが今はそこに棲む生き物によって使われている」という実際の状況や事情も知ることが出来ます。ニュースを見れば問題の概要は大体把握できるはずなので、もう一步、実際に見てみる、聞いてみるのが大事だと思います。

バーン

意識しなくても、身の回りに情報や取り組みが溢れているというと思っています。私は「環境問題を意識する」という言葉があまり好きではありません。例えば、マイボトルを持っていると「意識が高いね」と言われることがあります。環境問題に対して何かすることを意識が高いと言われるような状況を変えたいです。意識することはなかなか難しいことですし、環境問題は意識

が高い人が取り組むことではなく、全員が知っていかなければならぬことだと思おうからです。環境に配慮した選択が当たり前になることを目指しています。

塚原 それに、「意識が高い」人に頼ってはいけません。多くの人の行動を変えることは成功しません。例えば、ペットボトルではなく水筒を選ぶ時、「ペットボトルはプラスチックごみになる」と考えてくれる人も

いますが、「時間が経っても温かい飲み物を飲みたい」という意識に注目した方が人の選択を変えるには有効かもしれません。環境に優しい選択を強要するのではなく、人々が自然にその選択肢を選びたいと思えるようにすることが重要です。

曾根 この水筒(図3)、保冷と

保温の効果がマジで高いですよ！今日はラテを入れてきました。ずっと温かいまま飲めます。

塚原 そうそう、本当にいいで



図3

すよね。ステンレスボトルブランドのハイドロフラスクとコラボして作った慶應オリジナルの水筒で、ロゴの部分は市川さんがデザインしました。五五〇〇円と高めの価格ですが、修理しながら長く使ってもらおうという意味からも、この価格でチャレンジしたいという市川さんの想いに応えて、生協へ提案し企画が通りました。売れるかどうか半信半疑でしたが、結果としては、七月に販売開始して、SFCでは十一月には一部売り切れで再発注となりました。最近のヒット商品だとSFC生協の石川健司店長に言っていたいただきました。

曾根 飛ぶように売れましたね。水筒は飲み口が洗にくいと言われがちですが、これは飲み口が広くて、キャップは回して外せるタイプなので、奥まで手を入れて洗えます。しかも、持ち手の部分が壊れたらメーカーに修理してもらえるようになっています。

塚原 とても洗いやすいですよ。修理しながら愛着を持って使い続けてもらいたいと思っています。

——色やフォルムも魅力的です。七夕祭ではファッションスワップ²を企画しておられましたよね。そこで来場者に配られていたクールなデザインの水筒(図4)が印象的でした。デザインにもこだわりがありますか。

塚原 塚原研は、いくつかの班に分かれてSFCをフィールドとしたプロジェクトを進めています。古着



図4

のスワップ企画を実施した班にはデザイン隊長がいます。地元のリサイクル事業者(服部商店さん)から頂いた古布を使って、ハギレにメッセージをプリントしたパッチを作ってくれました。「声を上げるのはハードルが高くて、メッセージを身に着けることでできる発信もある」とのこと。身に着けて嬉しいデザインで届けられるとよりいいですよ。曾根さんたち省エネ班は最近、使

に呼びかけるポスターを作りました。そこでも「そつと後押しする」という意味のナッジという手法で、柔らかくメッセージを伝えていきます。

曾根 環境に優しいということ

を前面に押し出すのではなく、ナッジを用いたデザインや性能の良さによって人の選択を自然に導いていくようにしたいという思いがあります。

塚原 環境に優しい行動を、生活

の中に当たり前に組み込めるように仕掛けたい。そして、「こっちはいいね」ではなく、「こっちはいいね」を集めたいです。

●綺麗なキャンパス？

——ごみ箱のラベルが「燃えるごみ」から「燃やすすかないごみ」に変わったり、ペットボトルキャップを入れるカゴが付いたりしたことは、特に印象に残っています。

塚原 ごみ箱の改革については、分別と資源化を強化するため大学の公式な位置づけで実施できており、研究をベースにより良い提案をできるように企画を進めているところですが。当初は、大学から許可を頂いていたものの、塚原研のメンバーで一つひとつ地道に既存のごみ箱へラベルを貼っていききました。資源を分けて集めるとごみ処理費用も削減できるため大学側にもメリットがあり、次第にオフィシャルな位置づけになって、できることも増えてきました。

SFCはとても綺麗だし、学生たちの生活もキラキラ輝いているように見えます。しかし我々はあえて裏側もしっかり見つけようと、ごみ箱に捨てられたペットボトルの袋を全部開けて一週間分のペットボトルを調べたこともあります。マイボトルが普及したらどれだけペットボトルごみの分別や量に変化が出るだろう

かと市川さんが話していたのをきっ
かけに、自分たちで現状を調べてみ
るということをしました。

曾根 ほとんどのペットボトルは
キャップもラベルも付いたままでし
たね。中身が残っているものすらあ
りました。ペットボトル以外のごみ
も入っていましたし。

塚原 でも、そもそもキャップと
ラベルを外すように指示するサイン
がなかったわけなので、当然と言え
ば当然とも言えます。キャップとラ
ベルが付いたままのペットボトル
は、そのままでは、ペットボトルに
は戻りません。良くて食品トレーと
いったところかな。ペット³以外の
プラスチックが混ざるとリサイクル
のグレードが下がるんです。家庭の
ようにキャップとラベルを分けて出
してくれば、ペットボトルはペッ
トボトルとして再び使われ、上手く
循環していくのですが、なかなか浸
透しません。この行動変容はチャレ

ンジですね。SFCではやっと今二
割くらいが分別されるようになりま
した。

曾根 ごみと資源を回収するため
のステーションみたいなものができ
るんですよ。

塚原 そうなんです。まずは研究
棟からスタートして、学生が生活す
る空間にも順次導入していきますの
で、楽しみにしてください。

——リターナブル容器や水筒の販
売、新しいごみ箱の導入を実現する
ためには、関係各所との調整や合意
が必要だと思いますが、どのよう
に行われていますか。

塚原 ごみ箱については、衛生問
題を司る大学の委員会と協議して
います。また、中峯秀之事務長（湘
南藤沢事務室キャンパス事務長）
が、ごみ箱もマイボトルもすごく
応援してくれていて、前向きに検

討していただきます。中峯事務
長はSDGsやダイバーシティと
いった課題に取り組んでいる協生
環境推進室も兼務されているので、
そうした課題との共通性も見出し
てくださっているのではと思いま
す。学部長である一ノ瀬先生が主
宰する「サステイナブルキャンパ
スプログラム⁴」にも位置づけてい
ただき、ペットボトルから分別し
たキャップを福祉施設に寄付して
障がい者支援に繋げるなど、他分
野の教員との連携も広がっていま
す。職員と教員と学生との三者が
うまく噛み合い、話が進んだとい
う感じです。

●変化の連鎖

——SFCにおける環境問題への取
り組みはどのような段階にあると考
えておられますか。

市川 まだまだだと思っていま

みんなの研究に環境を掛け合わせ
てくれたらいいな。意見がぶつか
ることも良いと思います。「面倒く
さい」と言われたら、「うんうん、
それもそうだよな」と受け入れ
ながら、どうしたらいいのか考え
ていきたいです。

（構成：松本こころ）

注1 Fridays For Future: 未来のための

金曜日。政治指導者に気候変動を防
ぐ行動を要求するため、金曜の授業
を欠席してデモに参加するという学
生たちの国際的な運動。スウェーデ
ンの環境活動家、グレタ・トゥーン
ベリから始まった。

注2 ファッションスワップ: 使わなくなっ
た衣類を持ち寄り、交換すること。

注3 ペット・PET。ポリエチレンテレ
フタラートの略称。

注4 サステイナブルキャンパスプログラ
ム: 二〇二三年春から始動した、サ
ステイナブルなキャンパスを目指し
て学生やSFC中・高等部の生徒、
教職員が共に進めるプロジェクト。

注5 Synluxによる「アルゴリズムミッ
クチュール」。第四回H&M財団グ
ローバルチャレンジアワード特別賞を
受賞した。Synluxは、主にSFC出
身のメンバーから成る研究チームで
あり、現在は株式会社となっている。

塚原 SFCに来た時、「環境問
題について教えているけれど、行動
を変えるための選択肢がないな」と
思ったんです。リターナブル容器も
マイボトルもウォーターサーバー
も、まずは選択肢を提供したいとい
う思いで始めました。リターナブル
容器を選べば使い捨て容器よりも安
くランチを買えるし（レディバード
で二十四引きで提供中）、慶應マイ
ボトルがあるなら使いたいと思う人
もいると思う。自然と選びたくなる

ような選択肢をもっと用意してい
きたいです。そして、少しずつでもキ
ャンパスに変化が生まれれば、きつ
「お、なんか変わってきたぞ」と感
じてもらえるはず。そうやって小さ
な変化が連鎖していけばいいです
ね。環境問題には様々な種類や観
点があるけれど、まずは何か一つを
変えてみて、そうしたら他も気にな
ってきたぞというように意識が広が
っていくのが自然な形なのではない
でしょうか。

塚原研には多様な取り組みが広
がっているの、環境問題と何か
別のものを組み合わせた「〇〇×環
境」を起こしていけたらいいなと
も思っています。この間、SFC
生が開発した、AIを用いて廃棄
物が出ない型紙パターンを作る技
術⁵のことを知りました。自分の得
意なこと「環境」という観点を
加えたら、もっとサステイナブル
なアイデアになる。そんなふうに、

す。ごみの分別は面倒くさい、水
筒は洗うのは大変だから使いたく
ない。重たい。そういう意見もた
くさん耳にします。でも、少しず
つ良い変化を感じて嬉しくなるこ
ともあります。今朝、バスの中で、
全く知らない子のリュックサック
のサイドポケットに私たちの作っ
た水筒が入っているのを見てすご
く嬉しかった。まだまだだとは思
うけれど、いろいろな声を聞きな
がら、卒業まで頑張るつもりです。

曾根 まだまだだと思いは全
員一致していると思います。始め
たばかりだから、僕たちはきつかけ
を作れたらという気持ちでやって
います。SFCは環境問題をはじめと
する様々な社会問題に問題意識を
持っている人が集まるキャンパスな
のかなと思っていたのですが、正直、
それでもこの程度なのかと感じて
います。もっと頑張らないといけない
でも、既に始まっていることはもち

塚原 沙智子
（つかはら・さちこ）
環境情報学部准教
授。専門は環境政
策。

市川 美優
（いちかわ・みゆう）
総合政策学部 4年。
マイボトルの普及
とウォーターサー
バー設置班に所属。

曾根 直樹
（そね・なおき）
環境情報学部 4年。
省エネ班に所属。

バーン 杏雅愛
（ばーん・あなりあ）
総合政策学部 3年。
リターナブル容器
班に所属。

背景写真は塚原先生のご自宅。バルコニーに
小さなソーラーパネルが設置されている。



⑤



後日、塚原先生のご自宅とその近くの田んぼに伺い、先生ご自身の生活の一部を覗かせていただいた。



④



③



①



②



⑥

① 木の板を組み立てて作ったコンポスト。木と土さえあれば、簡単に作れる。

② 生ごみを入れて土を被せるだけ。

③ 段ボールとTシャツを使った小さなコンポスト。誰でも簡単にできるコンポストを研究中。

④ 石川初先生（環境情報学部教授）が、娘さんのために手早くスケッチしてくれたという絵。色をぬって飾っている。

⑤ 庭に生っていた小さな瓜。

⑥ 手のひら程の大きさの松ぼっくり。玄関に飾っている。

⑦ 束ねた稲は逆さにして乾燥させる。収穫も乾燥後の脱穀も手作業だが、昨シーズンは、ここで獲れた米だけで半年以上は米を買わなくて済んだという。

⑧ ヘチマのスポンジは、合成スポンジよりも長持ちする。程よく硬く、水切れが良い。「劣化するにつれて破片がポロポロと千切れてこないのがいいですよ」と塚原先生。

⑨ 掃除機はなく、箒とちりとりで掃除するのが快適なのだと言う。

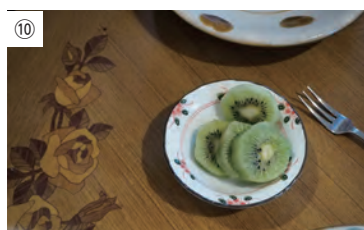
⑩ 地主さんからもらったというキウイをご馳走になった。近くに生えているキウイの木から収穫したものだと知り驚いた。



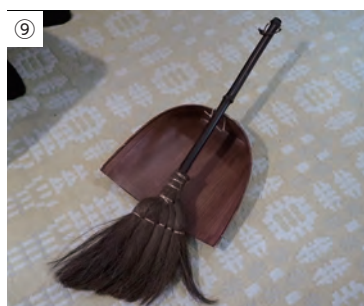
⑦



⑧



⑩



⑨



リターナブル容器でのテイクアウトランチの提供は、2023年5月にレディバードで

始まった。全国でリターナブル容器の事業を展開している「Megloo」のプロジェクトの中で、昨年の容器の利用数が全国1位であったとして表彰されたという。7月からは、パーンさんをはじめとするリターナブル容器班のメンバーと一緒に開発したというピビンパ丼も実験的に提供した。肉食に伴う環境負荷に考慮したベジメニューだ。この日、取材後にレディバードに行ってみると、2人の学生がリターナブル容器を片手に喋っていた。私が注文した後に来た2人も、リターナブル容器を選んでくれたようだ。「まだまだだとは思いますが、知ってくれている人はだんだん増えているかな」とパーンさん。リターナブル容器の返却率はほぼ100%を維持している。一緒に頼んだドリンクはプラスチック容器で提供された。変化は少しずつ。次は、持参したタンブラーに入れてもらえるか尋ねてみることにしよう。



塚原先生のある1日 —研究会のある日—

- 6:00 ● 起床。メールの確認、返信。
- 7:00 ● 慶應ポトルを準備し、バスで駅へ。電車で湘南台へ。
- 9:30 ● 研究会メンバーとともに管財担当者と打ち合わせ。
- 11:00 ● 研究会メンバーと共にカフェテリア・レディバードの支配人と打ち合わせ。
- 12:00 ● リターナブル容器でランチをテイクアウト。研究室で食べる。
- 13:00 ● 研究会で、各プロジェクトの進捗報告や方向性について全体で議論。
- 16:30 ● サステイナブルキャンパスプログラムに関して、一ノ瀬先生と打ち合わせ。
- 17:30 ● リターナブル容器を返却。ポトルへ飲み物を入れ、キャンパスを出る。
- 19:00 ● 帰宅。
- 20:00 ● 夕食後、娘さんと市民浴場へ。お風呂で今日あったことを話す。
- 21:30 ● 昔話を読んで寝かしつけ。
- 22:00 ● 研究会学生とのやり取り、自分自身の研究など。
- 0:00 ● 就寝。

☆塚原先生は2024年3月末でSFCを去り、同年4月から環境省に帰任します。塚原沙智子研究会の活動は、同じく環境省から出向の和田直樹先生が引き継ぎます。

SFC生の生態

勉強も研究も、サークル活動も頑張りたい。お金も稼がないといけないし、趣味やおしゃれだって楽しみたい。自分の生活について考えるのと同じくらい、社会や地球についても真剣に考えたい。そんなこんなで忙しいけれど、ちゃんと寝て、きちんと食べなくては生きてはいけない。全部を成立させながら生活するって、それだけですごく大変なことだ。大学生って一体どうやって生きていけばいいんだ？

当初、この企画は「SFC的ワークライフバランス」という名前だった。でも実際のところ、ワークとライフはそれほど明確に分かれていないし、SFC生にとって、研究活動と生活を切り離さない姿勢はとても大切なはず。調べてみれば、最近では「ワークライフインテグレーション」や「ワークインライフ」などという言葉によって、仕事と生活を切り離さない考え方も定義され始めているという。そんな議論を踏まえて、ワークもライフもその人なりのバランスで混在する、人それぞれの「生活」をそのままお届けすることにした。名付けて「SFC生の生態」だ。

「どんな時間の使い方をしているのだろう」と気になった人に編集部員が声を掛け、一週間のスケジュールを書いてもらった。SFC生がどんな生活をしているのかを覗いてみよう。

Kさん 総合政策学部2年

体育会弓術部に所属し、部活漬けの生活を送るKさん。長い弓を抱えてキャンパスを歩き回る姿が印象的だ。慢性的に寝不足を感じており、日吉キャンパスや三田キャンパスで行われる練習に向かう電車の中で眠ることも多い。

	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28
月	ZZZ	ZZZ	準備	SFCへ	授業@SFC	帰宅	課題	グルワのMTG ²	課題	ZZZ			
火	ZZZ	ZZZ	日吉へ	練習@日吉	オンライン授業	練習@日吉	帰宅	課題	自由時間	ZZZ			
水	ZZZ	ZZZ	SFCへ	練習@SFC	授業(SA ³)	帰宅	ゆっくり自由時間	課題	だらだら	ZZZ			
木	ZZZ	SFCへ	授業@SFC	課題@メディアセンター	授業	帰宅	だらだらしながら課題	だらだら	ZZZ				
金	日吉へ	練習@日吉	SFCへ	授業@SFC	ご飯	帰宅	寝落ち	翌日の準備	ZZZ				
土	ZZZ	三田へ	練習@三田	道具の修理	部のイベントのための買い出し	イベント準備	移動	部の夕食会	明日のイベントの準備	ZZZ			
日	三田へ	イベント準備	イベント(附属校の生徒を招いて弓術部を紹介する)			打ち上げ	帰宅	だらだら	ZZZ				

注1 グルワ：グループワークの略称。注2 MTG：ミーティングのこと。注3 SA：教員を補佐するスチューデント・アシスタント。

CASE2：自炊



※エコバスタバスタを数時間水に浸けておくことで茹で時間を短縮し、電気やガスを節約できる。

CASE1：通学



※共済など、通学中の怪我について発生した治療費が保障される仕組みがあります。

Aさん
環境情報学部4年

研究会のSAを務めつつ、インターンも含めて3つの会社に勤務している。毎日決まって帰る家はなく、3つの拠点を巡りながら暮らしている。「今日の夜どこで眠るかはまだ分かりません。」

	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28
月	睡眠	朝支度	研究①	昼食	研究①	夕食	開発	趣味	入浴	睡眠			
火	睡眠	朝支度	研究②	昼食	研究②	夕食	自由時間	趣味	入浴	睡眠			
水	睡眠	朝支度	入社	インターン				友人宅に	雑談/開発相談	入浴	睡眠		
木	睡眠	朝支度	通学	研究	昼食	ゼミ	夕食	友人宅に	雑談/開発相談	入浴	睡眠		
金	睡眠	朝支度	雑談	入社	インターン				夕食	自宅へ	軽作業	入浴	睡眠
土	睡眠	朝支度	研究①				夕食	研究②	入浴	睡眠			
日	睡眠	朝支度	業務委託				夕食	業務委託	入浴	睡眠			

Eさん
総合政策学部3年

建築と探検を愛するEさん。建築系の研究会に所属している。研究会ではSAとして活躍している上、探検部の元部長でもある。キャンパスでの寝泊まり、いわゆる「残留」をすることもしばしば。

	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	
月 <small>残留日</small>	作業	睡眠@SFC	デザインスタジオ準備	授業	空きコマに院ゼミに参加	研究会	ごはん@研究会	談笑しながら課題やる	睡眠@SFC					
火	睡眠@SFC	授業	授業	空きコマにバイト	鴨る ²	生協(endores ³)の改修	移動	ごはん	テレビ	睡眠@自宅				
水	睡眠@自宅	朝ごはん	戯れるインコと	ガラガラ	オンライン授業	移動	探検部部会	食事@河原	移動	課題	睡眠@自宅			
木 <small>残留日</small>	睡眠@自宅	バイト	課題や読書@公園	移動	友人の誕生日会@研究室	談笑	睡眠@SFC							
金	睡眠@SFC	朝ごはん	移動	図書館	授業@矢上	昼ごはん	授業@日吉	移動	バイト	移動	ごはん	銭湯	課題	睡眠@自宅
土	睡眠@自宅	朝ごはん	探検部	カヤック練習	移動	昼寝	課題	研究会活動	テレビ	睡眠@自宅				
日 <small>残留日</small>	睡眠@自宅	移動	インターン				移動	ごはん@SFC	課題(翌日のデザインスタジオの準備)	睡眠@SFC				

注1 院ゼミ：大学院のゼミ。注2 鴨る：鴨池の周りの芝生で時間を過ごすこと。
注3 endores：SFCの生協内のカフェ。学生が2023年に立ち上げた。

Sさん
看護医療学部1年

キャンパス内の学生寮イータヴィレッジに住むSさん。寝る直前まで友だちとおしゃべりしながら課題に取り組むのは学生寮ならではの過ごし方。週末に活動するヨットサークルに所属し、勉強と両立させている。

	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28						
月	睡眠	朝食	移動	授業	昼食	授業	ネット	授業	課題	夕食	課題	休憩	睡眠						
火	睡眠	朝食	洗濯	片付け	授業	移動	授業	ゴルフ	授業	移動	夕食	入浴	友人と雑談	ネット	睡眠				
水	睡眠	朝食	移動	授業	で教員と学生で勉強会	昼食	授業	移動	入浴	課題	夕食	友人と雑談	朝食	課題や雑談	ネット	睡眠			
木	睡眠	朝食	ネット	洗濯	読書	買い物	昼食	読書	休憩	課題	夕食	課題	ドラマ	友人と買い物散歩	入浴	誕生日会	片付け	課題や雑談	睡眠
金	睡眠	朝食	移動	授業	昼食	授業	移動	ネット	課題	夕食	雑談	入浴	用意	課題や雑談	睡眠				
土	睡眠	用意	移動	ヨットサークル		昼食	ヨットサークル	移動	夕食①	移動	夕食②	入浴	課題や雑談	ネット	睡眠				
日	睡眠	朝食	片付け	用意	昼食	片付け	休憩	移動	友人とライブに行く	移動	友人と夕食	移動	入浴	課題	ネット	友人と雑談	就寝準備	睡眠	

Hさん
総合政策学部2年

ヘルスケアにまつわる問題を扱う研究会に所属。大学では主に高齢者のコミュニケーションヘルスとベンチャー経営を学んでいる。SFCゴルフサークルとジャズ研で活動するなど大学生活を謳歌しつつ、家族との時間も大切にしている。

	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28		
月	睡眠	弁当作り	朝食	移動	研究会合同勉強会(月1回)	授業	移動	夕食	テレビ他	課題	睡眠				
火	睡眠	弁当作り	朝食	移動	授業	研究会	移動	夕食	課題	年賀状作成	睡眠				
水	睡眠	弁当作り	朝食	移動	授業	移動	研究会のマイプロ ¹ 活動	楽器練習	家の用事	夕食の支度	夕食	サークル活動	課題	睡眠	
木	睡眠	弁当作り	朝食	家の用事	課題	移動	授業SA	移動	買い物	ジム	夕食の支度	夕食	ゴルフ課題	研究会のマイプロ活動	睡眠
金	睡眠	弁当作り	朝食	家の用事	課題	移動	授業	課題@メディセン ²	サークル活動	サークル懇親会	移動	入浴	テレビ	睡眠	
土	睡眠	朝食	家の用事	課題	家族とゴルフ	夕食	テレビ	家の用事	年賀状作成	睡眠					
日	睡眠	朝食	庭掃除	楽器練習	昼食	楽器練習	課題	買い物	夕食の支度	夕食	テレビ他	課題	睡眠		

注1 マイプロ：2006年、SFCの井上英之研究会で提唱された探究学習の手法「マイプロジェクト」の略称。
注2 メディセン：SFCのメディアセンターの略称。

Mさん
看護医療学部1年

看護の枠に囚われず、建築やカフェ運営等様々なことに挑戦中。趣味の一環で音楽にも精を出しており、バンドではドラムを担当。カフェ運営をしているがコーヒーが飲めない。

	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28
月	睡眠	準備	バンド練	バイト	仮眠	MTG	課題	MTG	課題	バイト	MTG	作業	睡眠
火	睡眠	準備	授業	課題	バイト	作業	睡眠						
水	睡眠	準備	バイト	授業	バンド練	休憩 夕食	バンド練	睡眠					
木	睡眠	課題	授業	移動	プレゼン大会 @矢上	移動	家事	睡眠					
金	睡眠	授業	リハーサル	ライブ	打ち上げ	睡眠							
土	睡眠	家事	準備	移動	バイト	移動	バイト	睡眠					
日	睡眠	買い物	休憩	バイト	残留								

Iさん
総合政策学部2年

日吉のダンスサークルに所属し、精力的に活動している。研究会では発展途上国の国際協力について研究している。移動中は読書や課題をすることもあれば、Netflixで動画を観たり、音楽を聴いたりすることもある。

	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28
月	睡眠	朝食	移動	授業 @SFC	移動	夕食	学童のバイト	研究会の活動	入浴	睡眠			
火	睡眠	朝食	移動	授業 @SFC	移動	ダンス	移動	ダンス	移動	夕食	入浴	睡眠	
水	睡眠	朝食	移動	ダンス	ダンス練習会	夕食	移動	入浴	睡眠				
木	睡眠	朝食	課題	移動	研究会	授業 @SFC	→SBCに泊まる こともある ¹	睡眠					
金	睡眠	朝食	移動	授業 @日吉	ダンス	自由時間 (遊び・課題・ダンス・バイトなど)	ダンス	移動	入浴	睡眠			
土	睡眠	朝食	移動	ダンス練習会	同期と 夕食	移動	入浴	研究会の活動	睡眠	大会の支度			
日	大会の支度	移動	大会 (ない時は課題・ダンス・家族と過ごすなど)	移動	入浴	睡眠							

注1 キャンパス内のベータヴィレッジには滞在棟がある。

Dさん
政策・メディア研究科1年

国際関係を専門に学ぶ。母国であるウクライナに向けて、日本での体験をショートムービーのSNSを通して発信したり、ウクライナ文化や歴史、ニュースを日本語で投稿するインターネットメディアでボランティアとして活動したりもしている。

	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28
月	睡眠	ルーティング	身支度して大学へ	日本語の授業	昼食	メディアセンターかタウ館で勉強	授業	帰宅	夕食	部屋の掃除と洗濯をしてシャワーを浴びた後はMe Time ¹	睡眠		
火	睡眠	ルーティング	身支度して大学へ	授業	昼食	勉強 / 湘南台のイトーヨーカドーで日用品の買い物	帰宅	夕食	シャワー、Me Time	睡眠			
水	睡眠	ルーティング	身支度して大学へ	日本語の授業	昼食	研究会のミーティング / お出かけ / 三田キャンパスでのフォーラムに参加 / 勉強	帰宅	夕食	シャワー、Me Time	睡眠			
木	睡眠	ルーティング	学期前半は授業があった	日本語の練習 / 研究 / 課題	料理と昼食	勉強の続き	ミニデーム ²	夕食	シャワー、Me Time	睡眠			
金	睡眠	ルーティング	日本語の練習 / 研究 / 課題	料理と昼食	勉強の続き	友だちと日本語を勉強	夕食	シャワー、Me Time	睡眠				
土	睡眠	ルーティング	友だちとお出かけ / 旅行 / ハイキング / 読書 / 動画鑑賞 / たまに勉強することも	シャワー、Me Time	動画編集	睡眠							
日	睡眠	ルーティング	大抵は土曜日と同じように過ごす。新宿で行われているウクライナに連帯するデモに参加することも多い。護身術として、柔術を月に1回くらい習いに行く。	シャワー、Me Time	睡眠								

注1 Me Time : 自分の好きなことをする時間。お気に入りのドラマやアニメを観たり、家族や友だちと電話したりする。

注2 タンデム : 学習している外国語を母語として話している人同士がペアになり、互いに助け合いながら言語を学ぶ方法のこと。

取材メモ

Dさんは電車で移動する時には本を読んだりラジオを聴いたりする。読むのは大抵小説。ファンタジーが好きなのだと言う。アニメも大好きで、『BLUE EYE SAMURAI』をおすすめしてくれた。

大学近くの寮に住んでおり、朝ご飯と夜ご飯は寮の食堂で食べる。昼に寮にいる時は、たまに料理もする。お気に入りのエアフライヤーでチキンウィングやじゃがいもを焼いて食べるのが好き。

タスクや予定は紙のスケジュール帳で管理する。「日本の誕生日の四月から始まっているから！誕生日から一年を始められるのが嬉しい。」

Nさん
環境情報学部2年

脳科学を専門とする研究会に所属し、脳に関する実験を行っている。趣味はゲームと漫画、そして創作活動。一週間の過ごし方を尋ねると、ある特定の一週間について極めて詳細に答えてくれた。必ずしも予定通りにはいかない、リアルな一週間の過ごし方。

Calendar grid showing N's weekly schedule from Monday to Sunday. Activities include classes, research, gaming, and social time. Includes notes on specific events like 'TRPG' and 'NPC' work.

- 注1 ガイドペン：デジタルイラストを描く際に使うツール。オリジナルのものを作る。
注2 TRPG：テーブルトークロールプレイングゲームの略称。ボードゲームの一種。
注3 NPC：ノンプレイヤーキャラクターの略称。ゲームの中でプレイヤーが操作しないキャラクターのこと。
注4 リゼロ：ウェブ上で連載されている小説『Re: ゼロから始める異世界生活』の略称。更新に追いついていないので隙間時間で読み進めている。

編集長コラム 松本こころ

午後6時。授業が終わり、湘南台駅へ向かうバスに乗る。家に着いたら夕食を作って食べよう。お風呂から上がった10時にはなっているかな。メールを返信したり明日の準備をしたりしていたら、きっとあつという間に午前0時を回り、寝る時間になる。明日も早いかな。ああ、やることに追われて今日が終わっていってしまう。
そんなことを考えていると、隣で2人の学生が話している声が聞こえてきた。
「今から表参道でショッピングするから、それも買ってこようか？」
「あ、いいの？ ありがとう。」
今日はもう終わりだと思っている私の横で、これから始まる新しい予定に向かう人たち。今日が終わるまでの時間は同じ6時間のはずだが、時間はきっと、全員に同じようには流れてはいないのだ。
時間に追われる気分になるのが好きではなく、つついのんびりしがちな私だが、大学生の間でできることは思ったより少ないのだということにも気づき始めている。時計の針に追われて生きないためにこそ、戦略的に予定を組んで、どうにか賢く時間を管理したいものだ。
開いたパソコンに向かって喋りながら歩く人、昼寝をする人。いつも忙しそうにしているあの人や、のんびりしているように見えるあの。時間管理の得意不得意はあるだろうが、皆同じ時間をやりくりしながら生きている。
この企画を読んで、SFCでの生活がどのようなものかを知るきっかけになったり、大学生としての時間の使い方の参考になったりするのなら、それは大変嬉しいことだ。だが、必ずしも戦略通りにはいかない生活の実情の中で、「そんなものか。3時に起きる日もあれば、5時まで起きている日もあるよな。」と、気楽な気持ちになってもらえたら、それはそれでこの企画を立てた甲斐があったと思う。

取材メモ

Nさんの夢は動画やAR・VRを用いて、楽しみながら使うだけで、いつの間にか様々な知識や知恵が身につくような教材を開発すること。そのために、映像技術や創作だけでなく、人間の学習プロセスや認知科学についても学んでいるのだそうだ。
RPGをはじめとするビデオゲームで遊ぶのが趣味で、「面白くて魅力的な仮想空間を作ってみよう」と話す。人はどのような空間構成を「魅力的だ」と感じるのにも興味がある。
生活リズムを整えるのは難しい。それでも、自分の身体の状態を確認しながら、より健全に生活できるように工夫しているという。
脳の研究をしているからといって自分の脳で実験を行ったりわけではないが、経験上、七時間半の睡眠を取ったとき、脳が最もよく働くと感じられるらしい。それを踏まえて、六時三十分十五分に就寝し、六時四十五分に起きるという目標を立てている。一時期は実験の記録を立っている。
今回このようにして一週間の自分の足取りを辿る際にも、「ToDoリスト」が活躍した。その他にも、電子マネーの支払い履歴やSNSでのチャット履歴を見返しながらNさんは自分の行動を思い出していた。Nさんの生活の跡はそこに蓄積されているのかと興味深かった。

イータヴィレッジ
教員インタビュー

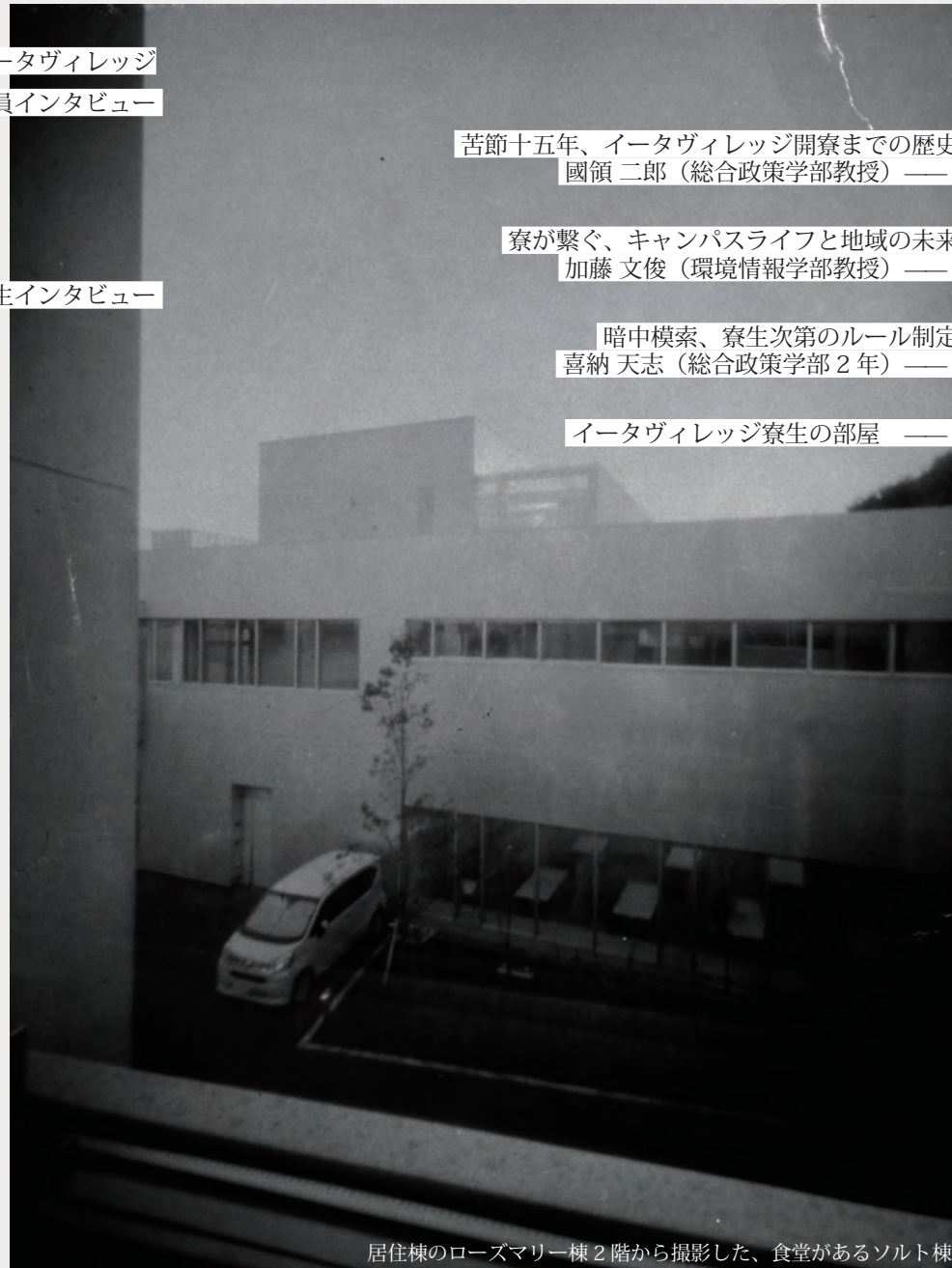
苦節十五年、イータヴィレッジ開寮までの歴史
國領 二郎（総合政策学部教授）—— p.40

寮が繋ぐ、キャンパスライフと地域の未来
加藤 文俊（環境情報学部教授）—— p.42

暗中模索、寮生次第のルール制定
喜納 天志（総合政策学部2年）—— p.44

イータヴィレッジ寮生の部屋 —— p.46

学生インタビュー



居住棟のローズマリー棟2階から撮影した、食堂があるソルト棟

2023年3月に開寮したキャンパス内にある学生寮、イータヴィレッジ。
開設に携わった先生方とローズマリー棟ハウスリーダーの寮生に話を伺った。





國領二郎

苦節十五年、 イータヴィレッジ 開寮までの歴史

二〇一三年三月に開寮したイータヴィレッジ。二〇一二年に建設が一気に進んだが、建設に至るまでの道のりは十五年間にわたった。元総合政策学部長としてイータヴィレッジ開設に携わった國領二郎先生にお話を伺った。

●キャンパス開設時からの夢

——イータヴィレッジ開設のいきさつを、教えてください。

学生寮の構想は、このキャンパス

が開設された当時からあったのではないかと思います。

それが少しだけイメージから現実に近い状態になったのが、慶應義塾が百五十周年を迎える二〇〇八年でした。当時、小島朋之元総合政策学部長と阿川尚之元総合政策学部長補佐がいらつしやり、阿川先生が構想を立てられたと私は聞いています。それを慶應義塾百五十周年のプロジェクトの計画の中に入れていただき、私もいつの日か寮を開設しようと思っていました。

●リーマンショックで一時は棚上げ状態に

——二〇〇八年から構想はあったのですか。

けれども、二〇〇八年にリーマンショックが起きたことで、慶應義塾も大きな痛手を被りました。慶應義塾百五十周年のプロジェクトでは、優先度の高い事業を実現することすら厳しい状況になってしまい、もとも優先度の低かったSFCの学生寮はほぼお蔵入りしてしまいました。

●またもお蔵入りの危機に

——二〇一〇年に再始動してからは順調に進んだのでしょうか。

ところが、活動再開の途中で東日本大震災が起きました。慶應義塾全体としては、本格的に信濃町の大病院を建て直す必要が出てきました。また、東日本大震災の復興のために開催されることになった東京オリンピック・パラリンピックの影響もあって建築費が上昇し、建設が一層難しくなりました。

話がどうしても長くなつたけれど、もっと詳しく語り出すと、もう、延々、涙の物語なんです。

最後、私が三田の常任理事を務めていた時に、当時の長谷山彰塾長が、やっと病院再建の目処が立ったということ、二〇一九年にこのプロジェクトをもう一回やり直すことにご協力いただき、それようやくイータヴィレッジが建つたんですね。

●幻の未来創造塾計画

——当初の構想では、どのような寮が建てられる予定だったのでしょうか。

二〇〇八年頃、現在のベータヴィレッジ（未来創造塾イースト地区）とイータヴィレッジ（未来創造塾ウエスト地区）とで、合わせて九百人規模の施設を作ろうと言っていました。その当時から、単なる学生寮ではなく、教室と一体化した施設にしようとしていて、ベータヴィレッジとイータヴィレッジ一体の開発を考えていました。全ての学生が泊まり込みでプロジェクトができるような短期のプログラム用の宿泊と、留学生や地方から上京してきた人たちが生活する長期滞在、この二つの泊まり方が共存する学生寮です。

しかし、これまでに説明したように、リーマンショックや「3・11」、オリンピックなどに、まあ蹴飛ばされ蹴飛ばされ、蹴飛ばされ蹴飛ばされ……。結果的に規模は小さ

くなってしまったけれど、よくぞ建つたと思います。

ちなみに、一気に九百人の寮を作るといふ目標を追いかけても何も実現しそうになかったんで、少しずつでもいいから実現させようとしたのが、百人規模の湘南藤沢国際学生寮やベータヴィレッジです。

●信念を持って夢を追い続ける

——度重なる災難に見舞われてましたが、どのような思いで、イータヴィレッジ開寮に漕ぎ着けたのでしょうか。

七転び八起きというか、七転八倒しながら作りました。建設費なんて、もう泣いちゃったことがあったさ……。

それでも、夢を忘れず。やっぱり大事です。世界中から来た学生と一緒に泊まり込みながらプロジェクトをしたり、周りの地域の人たちと一緒にいろいろな研究活動をしたりする。そういう夢やビジョンを

それでも諦めずに、リーマンショックが明けた時に、プロジェクトを開始することになりました。それが、私が総合政策学部長になって少し経った二〇一〇年頃の話です。慶應義塾百五十周年のプロジェクトが終わり、一時は棚上げ状態になっていた計画を一生懸命に復活させようとしている中で、寄付を募ることになりました。慶應義塾全体としてのファンドレイジング（資金調達）のプログラムの中にも入れていただきました。

大事にできました。二〇一二年には国際学生寮ができて、みんなとても楽しそうだったので、「これはやればできる」とだいぶ自信がつかれました。夢やビジョンを大事にしなから、そのために必要なことについて、一歩ずつ進めることが大切です。

（構成：藤田叶子）

國領二郎 （こくりょう・じろう）

総合政策学部教授。専門は経営学。

2009年10月から2013年7月まで総合政策学部長。

2013年7月から2021年5月まで慶應義塾常任理事。

加藤文俊



寮が繋ぐ、
キャンパスライフと
地域の未来

イータヴィレッジの構想から竣工までをよく知る環境情報学部教授の加藤文俊先生。今回は、開寮から半年経った（二〇二三年九月現在）イータヴィレッジと寮の今後についてお話しいただいた。

●キャンパスと寮が近づく

——イータヴィレッジが開寮してから半年が経過しましたが、この期間でイータヴィレッジはどのように進化しているのでしょうか。

まだ半年なのでわかりませんが、寮生が実際に暮らしている様子を目の当たりにして、ようやく寮が開いたことを現実的に感じられるようになりました。これからもっと、キャンパスと生活が密着している感覚が浸透していくのかな。

くり返しが起きていくのでしょうか。それも含めて、これからの進化が楽しみですですね。

●寮の暮らしをもっと知りたい

——長い間イータヴィレッジにかかわってこられた加藤先生ですが、現在の先生ご自身とイータヴィレッジの距離感についてお聞かせください。

物理的な距離で言えば、自宅とキャンパスとが離れているという実感

大きな出来事で、賑やかな感じが戻ってきたこと自体が嬉しいですね。

ただ、寮生とは、授業で何名かに会ったり、開寮式に参加したりという程度の接点だけです。個人的には、寮の暮らしをもっと知りたいと思っています。僕は以前から、「ドミトリイ・ライフ」という寮に住む学生へのインタビューを掲載したブログを書いていました。まだイータヴィレッジの学生にはインタビューしていないので、活動の一環としてかわりたいたい。大学生活を構成する「時間割にない学び」こそが大切なはずだという僕自身の関心を考えるうえで、寮生活のインタビューは引き続きやっていきたいです。

●若い人口が増える意味

——SFCの中に「イータヴィレッジ寮生」という集団が生まれたことは、SFCの全体の生活にどのような影響をもたらしたのでしょうか。

SFCがある遠藤という地区は、十八歳から二十二歳くらいの人口がとても少ないんですね。ただどこそこイータヴィレッジに住む三百人が増えると、SFCのみならず遠藤地区の若者の人数が一気に増えることになる。大学に与える影響もさることながら、もっと広がりをもってこの地区全体が変わっていくと面白いと思っています。

●学校と地域を繋ぐ場所

——最後に、イータヴィレッジに向けてメッセージをお願いします。

イータヴィレッジの広報をお手伝いした時、「森が開く」というコンセプトをよく話していました。今イータヴィレッジがある場所は、ずっと木々で外との繋がりが遮断されていたんですね。だから地域との繋がりをみたくていいものが実感できなくなっていました。駅とキャンパスが点と点で繋がって

いるだけだった。その森が開いたことは非常に象徴的です。今まで森に守られていたところが、外に向かって開かれたのがとても良い。

だから、寮生は寮に住んでない学生と地元を繋ぐ存在になるのかもしれない。今まではっきりと分け隔てられていたところを緩く繋げる感じが良いと思います。その繋がりがないと、キャンパスの中で考えていることもやっていることも孤立してしまううし。

これからイータヴィレッジ出身の人が寮を出て外で勤めて、当時の生活がふり返る。そのくらいまで時間が流れると、面白さが形となって見えてくるかもしれません。だからこそ、開寮一年目のみなさんにはあたらしい「文化」を作っていく特権があると思います。

（構成・藤井美来）

加藤 文俊
（かとう・ふみとし）

環境情報学部教授。専門は社会学。

2019年10月から2023年9月まで政策・メディア研究科委員長。

ハウススリーダー 喜納天志



暗中模索、 寮生次第のルール制定

な活動をされていますか。

イータヴィレッジには四つの居住棟がある。男女混住（フロア別）のパプリカ棟、女性専用のターメリック棟、男女混住（フロア混合）のローズマリー棟、男性専用のバジル棟だ。多くの寮生は、五人一組のユニットで暮らしている。ローズマリー棟を統括するハウススリーダーを務めている喜納天志さんに、イータヴィレッジの現状について伺った。

●ハウススリーダーの仕事

——ハウススリーダーとしてどのような

全体を見る立場ですので、共用スペースのキッチンなどが汚くなっていたら片付けるよう指示したり、寮生同士のトラブルが起きそうだったらそれをどうやって未然に防いだらいいかと考えたり、日々、自分でやることを見つけてやっています。事務の学生担当の職員さんや寮の管理人さんどう連携を取るかなど、中間管理職のような仕事をしています。

●一年目の寮は大変だけど自由

——どのような点で今のイータヴィレッジを誇りに思っていますか。

まだ開寮から間もない今は、いろいろなことを自分たちで作っていく段階なので、何事も自由に決められる点が良いと思っています。ただ、例えば季節ごとのイベントを企画する時は、試行錯誤をしながら何でも自分たちで一からやらなくてはいけないので、とても大変ではあります。イータヴィ

レッジでの寮生活

が楽しく、過ごし

やすいものになる

ように、きちんとしたルール作り

をしていくことは、今の寮生の世

代がやらなければならないことで

すね。

●寮の中での役割分担

——今の時点で、改善すべき点はありますか。

現状では、リーダーの役割をも

う少し明確にする必要があると思います。例えば、各ユニットにユニットリーダーという役目を持つ寮生がいますが、現在は、ユニット単位での活動よりも、ユニットの枠の外に出て、共用のスペースでみんなが交流する機会が多いです。そういうわけで、ユニットごとの活動が少なく、リーダーの活躍できる場面が少ないというのがこの頃の悩みです。ユニットリーダーという制度を活用して、それぞれの力を発揮できるようにしていかねばいけないなと思っています。

●イベント運営は試行錯誤中

——夏祭りなどのイベントをやってみて、どのような意見がありましたか。

イータヴィレッジ全体でイベントを開いても、棟をまたいだ交流が少なくなりがちだとか、イベント情報が伝わるスピードが棟によ

って違っていたりだとか、様々なことが明らかになりました。イベント運営に対する意見の伝達がうまくいく棟もいかない棟もあります。現在は、人数が一番多いローズマリー棟がどうしても中心になってしまっているのですが、どうしても他の棟を巻き込んで一緒に盛り上げられるのかを考えることも必要ですね。

●ランダムだからその繋がり

——今、一つのユニットを組む五名のメンバーは、学生担当によって割り振られているそうですね。割り振り方は、学生の趣味や研究分野など、ほかにも様々考えられるでしょうが、ユニットの組み方の理想の形があれば教えてください。

ユニットの組み方に関して、やはり僕はランダムだからこそのいいと思います。ランダム性があるから、ユニットの外に出てきて、ユニットを超えた交流が始まるん

です。だから、ユニットの中は、むしろ全然違うタイプの人間が一緒になる方がいい。人間の交流の中で大切なのは、自分と違うタイプや苦手なタイプの人が周りにいる中で、自分がどう生きていくかを探すことですよね。寮は、それ自身をもって経験できる場です。一風変わった人やいろいろなプロフィールを持つ学生がいるのがこのキャンパスの長所ですし、その長所をなくしてしまうのは、もったいない。全員バラバラですし、バラバラだからこそ、同じ一つの寮で生活することに意味があるのだと思います。

——ありがとうございました。

（構成：井庭晴香）

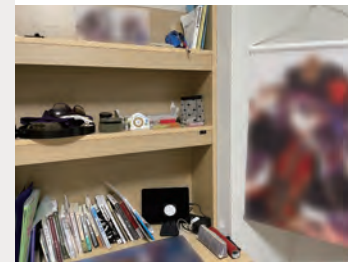
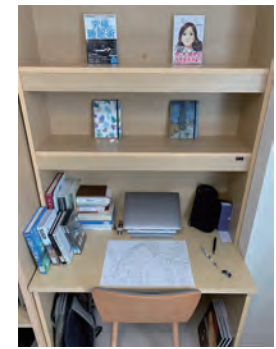
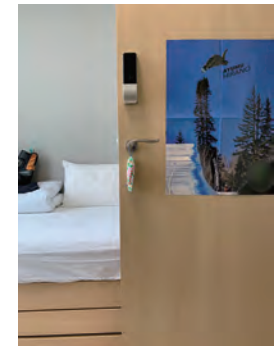
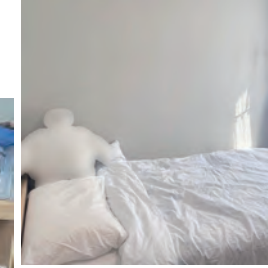
喜納 天志
(きのう・たかし)

総合政策学部2年。清水唯一朗研究会（JPD）に所属。

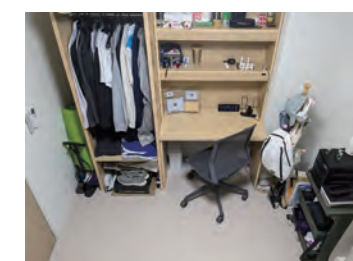
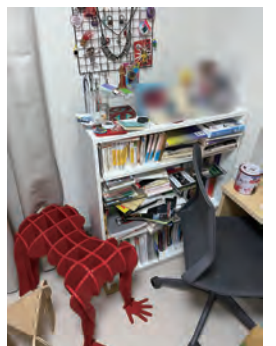
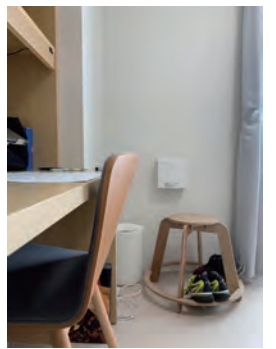
2023年3月からイータヴィレッジローズマリー棟ハウスリーダー。



食堂があるソルト棟と林に沈む夕日

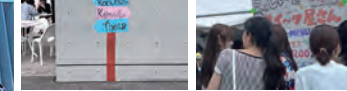


5人ユニットの中には、
ベッドと机が備え付けの
四畳半の個室がある。
プライベートな空間を寮生
たちはどのように活用して
いるのだろう？
特別に覗かせてもらった。



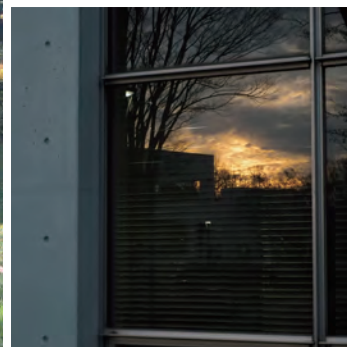


キャンパスの姿
2023 秋



SFCの学園祭、第34回七夕祭が2023年7月1日、2日に開催されました。SFC芸術祭とともにレポートします。

七夕祭取材記



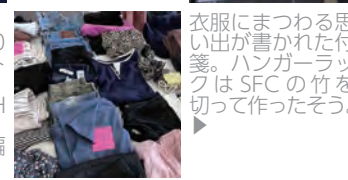
我々編集部も、雑誌の配布と対面読者アンケートを行いました。来場者や読者の皆様と会話できたことが何よりも楽しかったです。▶



山本薫研、アラブ文化紹介企画で出会ったスヌマークというスパイス。紫蘇のような香りがしました。▶

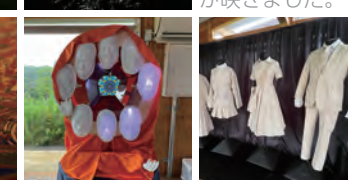
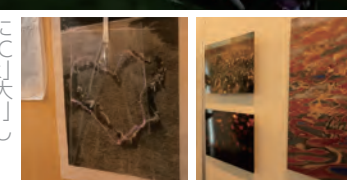
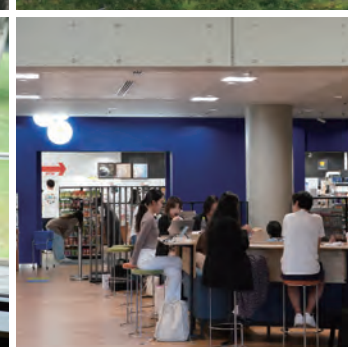
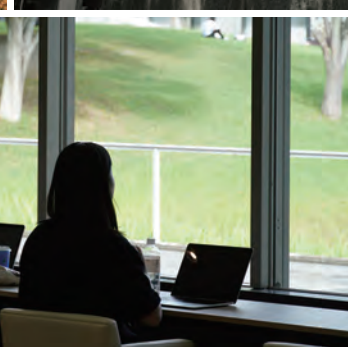
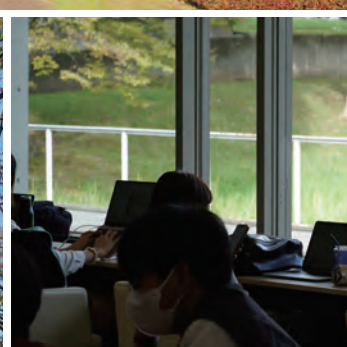
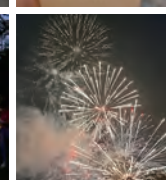
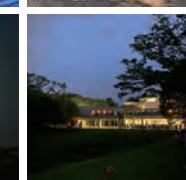
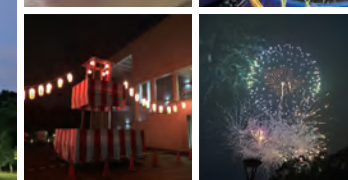
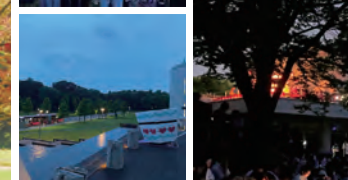


◀天候の影響で一部のステージは屋内で行われました。天然の舞台背景が美しい。



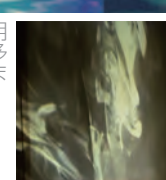
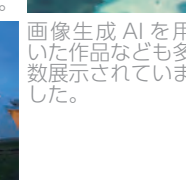
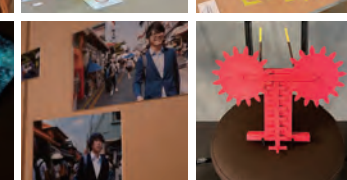
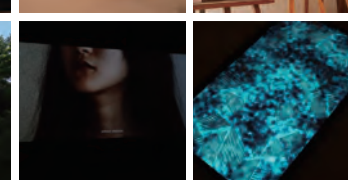
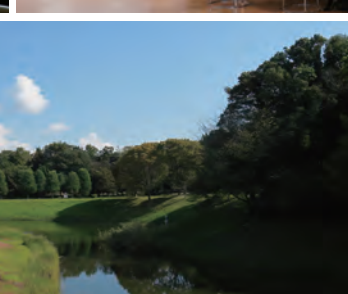
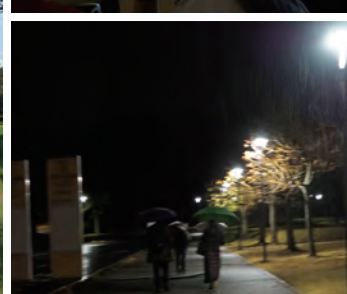
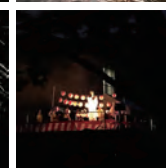
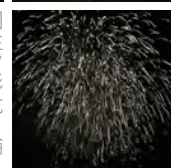
塚原研による衣類交換企画。500円で象がプリントされたTシャツと「THE NORTH FACE」のフリースをゲットした編集部員も！▶

衣服にまつわる思い出が書かれた付箋。ハンガーラックはSFCの竹を切って作ったそう。



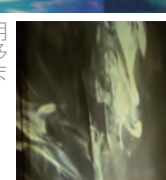
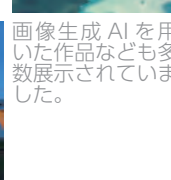
2022年11月に開催された「SFC Creative Week」が、「慶應義塾大学 SFC 芸術祭」に改称されました。

◀慶應義塾公認団体花火師会の学生が打ち上げる七夕祭の花火。雨の影響で打ち上げが危がりましたが、無事、夜空に大輪が咲きました。



◀お菓子を隣の人に渡す装置。

画像生成 AI を用いた作品なども多数展示されていました。



SFC 芸術祭 2023
Keio University SFC Art Exhibition

SFC 内にある滞在型教育研究施設 Student Build Campus で「慶應義塾大学 SFC 芸術祭」の展示が七夕祭と同時開催で行われました。

When I was young

学生にとって、教員はどこか遠い存在である。
しかし、そんな教員にも学生だった時代がある。一体どのような学生生活を送り、それは、その後の人生にどのような影響を与えたのだろうか。
今回は、総合政策学部 松井孝治教授に若かりし頃を振り返ってもらった。



行政改革会議事務局勤務時代（一番右）

松井孝治

●旅館の次男として育った幼少期

「世のために仕事を」母の教え
——先生のお生まれから幼少期について教えてください。

終戦（昭和二十年）後そんな時間を経っていない昭和三十五年に旅館の家に生まれました。僕らの親世代は昭和一桁世代や大正生まれで戦争経験者です。もともと個人旅館だったのですが、団塊の世代が中学校の修学旅行で京都に来る時代になると、うちは団体旅館になりました。

「右肩上がり」の時代だったので両親は忙しく、子どものことはほったらかし。晴れた日は公園で雨の日は級友の家を回って子ども同士で勝手に遊んでましたね。

両親は昔気質だったものですが、旅館住み込みで、私も高校一年生の冬までは旅館の一室で育ちました。プライベートはなく、親父が社長でお袋が女将で、特に母親は朝四時過ぎに起きて夜中まで働き詰めだったので、毎日の食事は板前さんの作る賄いという特殊な環境でした。

九つ上の兄がいました。兄弟で後継を揉めてほしくなかったのか、母は常日頃、弟の私には「あんたは世のための仕事をし」と言っていました。

●「子育てを社会で」という考えの原点

——小学校に入ってからどんな子ども時代を過ごされましたか。

京都の街中の小学校は皆そうですが、隣の小学校まで歩いても五分とからず、とにかく狭い学区でした。小学生の中学年までは学区外にほぼ出ることは稀で、洛中（ダウンタウン）の町内で育てられました。旅館の子や老舗の団扇屋など職人商売人の子が多く、今ほど塾通いも一般的でなく子どもたちだけで学校の裏の公園などで遊んでいました。

それでも、町内のおっちゃんおばちゃんがかつて見たはるとい感じでした。「公園で喧嘩して誰かが泣かされた」という話があると、普段はほったらかしなのに、家に帰ると、「あんた今日なんかあったん？」と親にもうバレている（笑）。共同体としての息苦しさを感じるかもしれないけれど、それもひとつの時代というか、地域の知恵として「みんなが忙しくしている商人の街だからこそ、お互いの家で輪番で遊ばせる」とか、「何かあったら互いに連絡する」とかということが徹底されていた。

●「古典芸能に親しんだきっかけは中学一年生」国語の先生の影響で

——小学校と中高との違いはありましたか。

一九七〇年代初めの京都は公立中学に問題が多く私立中学校に進学させる風潮があり、私も小学校五年生





高校時代（中央）

頃から塾に通うようになりました。いつも遊んでいた学校裏の御射山公園にも普段は行かなくなりましてが、たまに公園に行くと「よう来た！」とか「戻ってきたね！」とかと声を掛けてくれて、賭けビー玉²など、ありとあらゆる遊びをそこでやっていましたね。洛星中高等学校という進学校に進みましたが、世の中の縮図としての多様性は小学校の方があったように感じます。

洛星には良い先生が多く、特に中学一年生の時の国語の木村先生

●SFCの文化を作れ

——最後にSFCの学生へメッセージをお願いします。

SFCはSFCでいい。小細工は不要です。ただ、破天荒なはずのキャンパスの割に真面目な人が多いので、もっとエッジが立ってもいいと思います(笑)。SFCは当初、大都市にあるキャンパスではなく、スタンフォード大学のような「郊外型キャンパス」として、先生方も学生街に住み込むような街を作ろうとしていました。実際には、今のSFCの学生は大半が横浜や都内から通っています。それなら、SFCだけでも他大学と交流するでもいいので、



は印象に残っていて、「娘道成寺」という歌舞伎を解説してくれたことは未だに覚えています。お姫様の声色を使ったり、蛇の怖い形相になったり、「ここが見どころだ！」と教えてくれたり。クラスみんながその話にやられてしまった。中学一年生の年末に、京都の南座³で

(吉例) 顔見世興行⁴があり、木村先生に引率していただきました。一番安い天井桟敷で実物を観たら、先生の解説の方が面白かった(笑)。まあ、当時は今と違って、イヤホンガイドもないし、テレビで見れば迫真の演技でも、舞台から遠い安席では、演者が豆粒のように見えるだけ。それでも、実際にいったということが大事。それに、教わったストーリーを追いかけてながら、「このシーン教わった！」とか、「この場面はこういうことだったんだ」とか、そういう気づきもありました。

僕は今ゼミで「古典芸能に見る日

都心とももつと混ざり合うコミュニティを大切にしてほしいです。

それと併せて、「SFCのまちづくり」をぜひやってほしい。大学が授業を受ける場所に過ぎないのであれば、Zoomで事足りる。けれど、SFCで誰かと駄弁¹ったり、人生を語ったりする空間を作ってほしい。辺境にこそ文化があり、文化は辺境が作るもの。これは教員のせいでもあるけれど、SFCは辺境にあって文化がいまひとつ足りない。欧米の大学はもつとアートを大切にしています。SFCでも教員と学生が協力して、多様なアートをしている人たちを招き入れて、音楽や演劇から触発していく場所ができたらいいなと思います。学生生活で楽しいのは、映画館で映画を見たり、歌舞伎を見たり、寄席で落語を聴いたり、そういうアートのな部分で触発される経験だと思います。それがSFCには少ないんだよね。学生時代の一番の資産は、何かをネタに「駄

本の社会と文化」をテーマにしているくらいですが、古典芸能に親しむきっかけになったのは、この中学一年生の時の顔見世興行です。

●駒場キャンパスとSFCの共通点

——その後東京大学に進学されましたが、学生時代で一番記憶に残っていることはなんですか。

京都では京都大学へ進む人が主流でしたが、自分はむしろ非主流派の道歩む意気込みで、辺境としての東京を選んで進学しました。当時は、親元を一度離れて外の空気をのびのびと吸いたい、東京がどんな街か知りたいと思っていました。

東京大学で同じクラスになった奴らは突き抜けていて、とても面白かったです。今では有名人になっている人が少なくありません。上京したばかりの頃は、クラス全員が東京弁を喋るので、「なんだこのキザな話し方は！」と思っ

「捨て」こと。溜まり場として語れるような場所をキャンパスで育てた方がいいと思います。在学中でも、卒業生になってからでも、SFCが「SFC的な文化」をどう作っていくかを考えてほしいですね。

——ありがとうございました。

(構成：青木陽花)

した(笑)。

大学二年生になる時に所属学部の振り分けが行われ、多数が本郷キャンパスの法学部や経済学部に進む中、僕は駒場キャンパスの教養学部を選びました。僕はSFCに来ると、いろいろな意味で駒場を思い出します。例えば、駒場の教養学科もSFCと同じようにいろいろな先生がいる。国際関係論ひとつとっても、国際政治、国際経済、比較文化の先生もいるし、キャンパス内の人数も少なく、先生との距離も近い。履修したい授業も自分で選べるから、悪く言えば全部つまみ食い¹で中途半端になっってしまうけれど、よく言えば押しつけの定食ではなくて、自分で好きなものを選んで、組み合わせられる。しかも、特にSFCの大学教員は象牙の塔にこもらず社会問題に対して積極的に関わる問題意識が強いところが、当時の駒場キャンパスに似ていますね。

注1 右肩上がり・グラフの線が右に向かって上がっていく形から、後になるほど状態が良くなること。戦後四十年ほどの間、東京五輪(一九六四)や大阪万博(一九七〇)があった高度経済成長期に日本経済は「右肩上がり」が続いた。

注2 賭けビー玉。柄や大きさの異なるビー玉を賭け、勝者がビー玉を持ち帰れる遊び。

注3 南座。京都府にある劇場。現在も歌舞伎を中心にした公演を行っている。特に毎年末に行われる「吉例顔見世興行」は京都の風物詩となっている。

注4 吉例顔見世興行。歌舞伎発祥地に建つ「南座」で行われる、東西の人気歌舞伎役者が一堂に会す一大興行。出演する役者などの名前を書いた「まねき」と呼ばれる看板が劇場入り口にずらりと並べられることでも有名。



松井 孝治

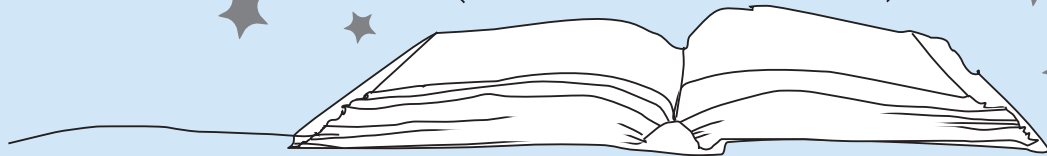
(まつい・こうじ)

総合政策学部教授、京都市長。専門は統治機構論。

稲垣栄洋『弱者の戦略』（新潮選書、2014年）

ローレンス・フリードマン『戦略の世界史—戦争・政治・ビジネス（上・下）』

（貫井佳子訳、日本経済新聞社、2018年）



研究室に来た学生に、「すごい数の本ですね。全部読んだのですか？」と聞かれることには慣れた。若干の見栄は張っても、嘘はつかない。もちろん全部読んでいるわけではない。最初から最後まで精読した本は、全体の三割、二割、いや一割以下かもしれない。

買った本を読まずに積んでおくことを指す「積読」という言葉がある。「読まなければ」「でも読む時間が無い」という読書人にとつての永遠の葛藤が込められた何とも深い言葉である。だが、大学教員のような「プロ」は、もちろんもっともらしい言い訳を用意している。可能なときに買っておかないと入手できなくなる可能性があるので、必要ときに手元がないと使えない、などなどだ。学生に見せる必要が急に訪れるかもしれない。どのような言い訳をつけたとしても本が視界に入っていることが重要だし、本に囲まれている安心感のようなものもある。最後は理屈ではない。

しかし、これをこじらせると、その先に待ち受けるのは、本のみならずコピーした論文・文献の束が積みあがる空間である。それぞれに特徴的な表紙・背表紙を楽しめる本なら

まだよいものの、コピーの束は見た目も悪い。

雑誌論文をPDFでダウンロードするのが当たり前の世代は知らないかもしれないが、私が大学院生だったほんの二十年ほど前まで、論文といえば図書館で製本されたバックナンバーを抱えてコピー室に行き、そこでコピーするものと相場が決まっていた。コピー代もかさんだものだ。さらに、余白を調整してきれいにコピーすると、それだけで勉強した気分になつてしまうという落とし穴まであった。コピーした論文を抱えて図書館を出る瞬間、何だか研究がはかどった錯覚に襲われたものである。そしてそのまま良い気分が院生仲間と居酒屋に向かう。

買って本棚に並べて（あるいは積み上げて）眺めるだけの単行本に、コピーしただけで満足してしまう雑誌論文。いずれも困った話だが、読書の周辺に広がるこうしたものを否定してしまうのも寂しい。一連のプロセスのすべてが読書だ。そのはずだ。

そんな強弁を試してみても、実際に読まないことには始まらない。研究者という立場上、私の場合、本を読むのも書くのも仕事の一部である。

る。それでも十分楽しいのだが、趣味としての読書はもっと楽しい。そして、趣味と仕事（実益）がうまく重なりあえばなおさらよい。勉強、研究、仕事で読書をする場合の幸せの瞬間は大きく分けて二種類存在する。

第一の幸せは、必ずしも専門分野でない本を読んで、専門に直結する指摘に出会うときである。予期しないものであることもあれば、下心たつぷりに狙って出会うこともある。いずれであっても小躍りするほど嬉しい。

稲垣栄洋『弱者の戦略』（新潮選書、二〇一四年）は、近年で最も心躍った一冊だ。著者の稲垣は植物学者である。植物も動物も普段はあまり読まないジャンルだが、「戦略」という言葉についてひきよせられてしまった。競争の厳しい自然界で弱そうな動物や植物はなぜ生き残っているのか。これを「弱者の戦略」として描いたのが本書だ。

群れる、逃げる、隠れる、ずらす、そして細分化してニッチを作り、狭いところでも「ナンバー1」になる、虎の威を借る、コバンザメ戦略など、さまざまな事例が紹介される。どれも「せこい」がそれだけに親近感が

わく。強者に対して正面から挑むことを避けるのが共通点だろうか。そしてそれらはいずれも成功が実証された事例なのである。そうでなければ、一見弱い動物はすでに滅びている。目からウロコとはこのことだ。

さらに、人間は「万物の霊長」として地球上に君臨しているものの、生物としての人間は「常に弱者」であり、「弱者は常にさまざまに工夫し、戦略的に生きること」を求められる」とも指摘される。そして、「丸腰のまま大自然の中に置き去りにされたとしたら、人間ほど弱い存在はない」といわれ、はたと気づく。戦略が最も必要だったのは人間で、「弱者の戦略」は、弱い動物への哀れみの議論ではなく、回りまわって我々人間の話だったのだ、と。

そしてこれは、国際関係にもあてはまる。中小国は大国のマネをしても成功しないし、戦略が必要なのは大国よりもむしろ中小国ではないか。そう考えて、戦略に関する本流の本に手を伸ばす。

そこでやってくるのが、第二の幸せな瞬間である。それは、専門分野の本を読みながら、それを大きく超えて視界が開けるときである。専門分野の本を読むのは仕事のためだ

が、そのさなかに、狭義の仕事以外にも広く人生に役立つような話に気づけましたら幸運だ。

戦略については日本語でもまたの本があるが、ここは戦略論の泰斗であるローレンス・フリードマンに任せるほかない。原著のタイトルは、そのまま「Strategy: A History」である。しびれるほどの簡潔さで、彼にしか付けられないタイトルだ。日本語訳は貫井佳子訳『戦略の世界史—戦争・政治・ビジネス（上・下）』（日本経済新聞社、二〇一八年）として刊行されている。

先ほどの『弱者の戦略』で触れた点についても言及がある。いわく「もともと力をもっている者にとつて、戦略はさほど難しいものではないだろう。より豊かな資源を分別をもって用いれば、成功する可能性は高い」。だからこそ、「弱者の戦略がまさに創造性を試される」とも述べている。さらにフリードマンは、「戦略とは、当初のパワー・バランスが示す以上のものを引き出すためのものであり、パワーを創り出すアートなのである」とも指摘する。そのとおりだ。これは国際関係のみの話ではない。

二つの話がここで完全に重なっ

た。植物学者と戦略論学者が同じことをいっている。これは人間のみならず生物の真理に違いない。

戦略という言葉、そして概念は強者ではなく弱者とよりつながっている。にもかかわらず、国際関係のみならず世間一般でも、戦略という言葉には強者（大国）の響きがある。それは、我々が誤解してきたから

という面もあるが、強者の戦略の方が他者への影響が大きいという現実も存在する。例えば冷戦時代の米国とソ連、あるいは今日の中国のような大国、さらには超大国の戦略の方が、他国への影響が大きいために無視できない。しかし、戦略の影響が大きいことは、戦略に秀でていることを意味しない。力を持っていれば、強引ではあっても、物事を力でねじ伏せることが可能かもしれない。小国はそうはいかない。ただでさえ少ない力の使い方を間違えば滅びてしまう。

そして問われるのは、我々一人ひとりにとつての戦略だ。自らを弱くしと考える人ほど戦略が必要である。何度でも繰り返そう。戦略は強者のものではなく、強者に対抗する、さらにはいえば強者との直接対決を避けて自らの生存をはかろうとする弱者

のためのものである。

こうして、全く異なる分野の本の議論が読者の頭のなかで完全につながる。この瞬間の知的幸せを一人でも多くの人にあげて欲しい。そのためには積読は大きな助けになるはずだ。ふと目に入る、ふと手に取ることから新しい世界が広がるのである。



鶴岡 路人 (つるおか・みちと)

総合政策学部准教授。専門は現代欧州政治、国際安全保障。

編集後記

慶應SFC学会

発行人 黒田 裕樹 (会長 / 環境情報学部 教授)

担当理事 宮代 康文 (総合政策学部 准教授)

事務局 田坂 真美

編集長 松本 こころ (総合政策学部 2年)

副編集長 藤田 叶子 (総合政策学部 2年)

編集委員 青木 陽花 (総合政策学部 4年)

浅野 悠人 (環境情報学部 4年)

工藤 美桜 (総合政策学部 3年)

深町 優雨 (総合政策学部 2年)

荒井 美海 (環境情報学部 2年)

福原 衣織 (総合政策学部 1年)

堀江 真咲 (総合政策学部 1年)

吉松 野乃子 (総合政策学部 1年)

井庭 晴香 (環境情報学部 1年)

藤井 美来 (環境情報学部 1年)

表紙 / 特集デザイン 藤田 叶子 (総合政策学部 2年)

堀江 真咲 (総合政策学部 1年)

この号のきっかけになったのは、ヴァイマル時代のドイツ美術が好きだというある友との会話でした。今まで築かれてきた美しい文化は大切にしたい。でも、生活の実情から、便利で安く、簡単に消費できる大衆的な文化に惹かれる気持ちもある。こういう半ば諦めの気分が当時の美術には滲み出ている。そして、同じように僕も、実際の一人暮らしの中で、お金の問題や面倒くささから、美しい生活用品を諦め、安くて便利な道具に妥協している。

今号の特集「生活があるから」では、生活にまつわる記事を集めています。「生活の研究」では、分野の異なる4人の先生方にご自身の研究活動や生活について話していただきました。テーマは違っても、それぞれの事情を丁寧に読み解く先生方の姿勢には共通するものがあります。「SFC生の生態」は、各自の生活に対する姿勢の違いがスケジュールの書きぶりからも浮かび上がる記事になりました。「イータヴィレッジ」では、寮設立の経緯や、運営の理想と現実を語っていただき、これからのイータヴィレッジに思いを馳せる内容となりました。

雑誌というものは、その名の通り、数々の記事が雑多に集められているからこそ面白いと思います。様々な要素が複雑に絡み合うという点で、生活と雑誌は似ています。今号を読んで、これからの生活の一部となるような言葉や写真のかけらを一つでも拾ってもらえたなら、この上ない喜びです。

この76号のきっかけをくれた彼は、編集部による制作が始まる前に亡くなりました。もし今も彼と話せるなら、差しあたり諦めている美しい生活も、心の中で「私の夢の生活」として思い描き続けてい、それは無意味ではない、と伝えたいです。

生活を人に見せることは当たり前のことではありません。それにもかかわらず、今号の取材や撮影に応じていただいた皆様、そして、様々な形で関わってくださった皆様、本当にありがとうございます。心より感謝申し上げます。

ここに集められた生活と言葉が、さらに別の誰かの生活や言葉へと繋がっていくことを期待して。

2024.2.19 編集長 松本こころ

発行日 2024年3月14日

発行所 慶應SFC学会

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 5322

0466-49-3437

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp

無断転載・複製を禁じます。ご相談は慶應SFC学会までお寄せください。



KEIO SFC REVIEW No. 76

ISSN 1343-3318

発行所 / 慶應SFC学会

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>